

大本教學

第四号

朝	嵐(一)……………	大本事件回顧歌……………	出口王仁三郎(2)
教育について……………			(12)
①喬育(「靈界物語」抄)②教育の基礎(「出口王仁三郎全集」抄)			
③教育の三大事(「信仰叢話」抄)④教育私見(「こころの帖」抄)			
お筆先断片考(一)……………		出口うちまる	(21)
出口聖師の言葉を研鑽する(一)……………		大国以都雄	(24)
どういう神さまを拝んでいるか……………		桜井重雄	(32)
世界経綸の二大根本義……………		木庭次守	(38)
大本祭儀史考Ⅱ開教時代……………		米川清吉	(41)
出口聖師の吉岡談話……………		(資料紹介)	(54)
教学の研鑽を望む……………		大国以都雄	(56)
大本教義から見た健康道(一)……………		三浦一郎	(62)
靈界物語の手引(資料篇)目次(案)……………			(73)
編集後記……………			(84)

大 本 教 学

第 四 号

善^{ぜん}のわかるは手間^{てま}がいるぞよ。悪^{あく}でありたらすぐに榮^{さか}えるが、しりすばまりぞ。
ぞ。いまの人民^{じんみん}は子供^{こども}までも、学^{がく}でこしらえた知恵^{ちえ}であるから、親^{おや}をあなどりて
しもうて、理屈^{りくつ}づめにあわせて、金^{きん}を沢山^{たつびつ}いれて勉強^{べんきよう}さして、間^まに合^あうようにな
ると、親^{おや}の力^{ちから}になる人民^{じんみん}は稀^{まれ}であらうがな。このやり方^{かた}では、やまと魂^{たましい}ではあ
るまいがな。

(大本神論Ⅱ明治35年旧10月19日)

教学研鑽所

朝

嵐

(1)

——第二次大本事件回顧歌——

出口 王仁三郎

—

治維法違反容疑者としてけいさつへ拘置されたる師走の八日

取りしらべ漸く終へて虎の館に通ひて猫の如くなりぬる

大虎は小猫を数多さいなみつくはへて送る狼館へ

狼の古巣にしはし留められオリオン星座に入りし我かな

オリオンの星座に我は収まりぬ昭和十一 三月十三日

黙々と星座に座して見はるかす地上の塵の穢くもあるかな

暗き星の右往左往に行き交ひて星座をのぞくブリキの光よ

かすかなる鍼力の光をほこりがに星座をのぞく小熊星かな

照る月の光は星座にひそみつつ暗を照らすと心がまへす

山科の里に送られただ一人又もや星座にとざされにけり

大空を渡らふ月の身にしあれど時のいきほひ星座にかこまる

月も日も清しく照れど神界の月黒雲におほはれにけり

日に三度弁当めしを食ひながらうき世の闇を味ひにけり

太白星東にかがやく時を待つ我は地上のはうき星かな

天地を掃きて清むる彗星の今日は星座にちぢこまり居る

日支事変起きしと聞きし夕暮はオリオン星座も暗かりにけり

オリオンの星より降るもち月の御代を照らさむわが思ひかな

或は満ちあるひは欠くる月ながらオリオン星座にあるはなやまし

月は今雲のとばりにとざされて地上を照らすよしも無きかな

朝つ日の光^かさす窓にぬかづきて君安かれと祈る朝宵

大君の御心安んじ奉るすべなき我を悲しみにけり

オリオンの星座を出でて支^{から}那国の四百余州を照らさむと思ふ

北支より南支に浪のおし寄せてわが国民の心浮き立つ

小熊座のそとに聞ゆる国民の万歳の声に心安らふ

小熊座の夜半を眠らず天地を思ふ心の光をとざさる

あしびきの山科の里に送られて窓辺に曇る月を見るかな

天津日のわが窓照らすまひる間の光は内外のへだてなきかな

隔てなき月日の光仰ぎつつ神の守りの深きを思へり

真夜中に山科山を分けのぼるオリオン星座に心ときめく

オリオンの星座にひそむわれにして日月をしたふ心は深しも

天地も一度に砕くる心地して来たるべき世の暗を悲しむ

東の山分け昇る朝つ日の光を仰ぎて御国を祈るも

君の為御国のためと真心を照らさん月にかかりし黒雲

日を追ひて太らむ月の光^{かけ}みつつわが行末を思ふ楽しさ

山の端の三日月を見て思ふかなやがては満つる望月の光

天地の神の恵みに守られてオリオン星座のせまきを知らずも

山科の館に狼迫り来て噛みつく如き言靈放てり

迫り来し狼われに齒も立たず尻尾を巻きて帰り行くなり

立ち去りしこの狼のうしろ姿を見送りわれは吹き出しにけり

小犬等が狼を追ひし我を見て心臓つよき男の子と驚く

心臓が強くなければこの度の大法難をほどくよしなし

かねてより斯くあらんとは知りながら斯くも早しとは思はざりけり

大神の仕組ならんかオリオンの星座に友と感謝ささぐる

天地の神に感謝すばかりなりわれ等が友の修業の為めぞと

有難しかたじけなしと思うかな身魂も安き星座にすはりて

まめ人の上安かれと天地の神の御前に祈りこそすれ

吾妹はわが子は法の友どちは如何にうき世を過し居るらん

朝夕に神に感謝を捧げつつ法の友等の無事を喜ぶ

三千歳の神の仕組の開け口いよいよ来ると雄たけぶ我なり

教御祖宣らせ給ひしまさ言の世に現はるる時ぞ嬉しき

元祿のむかし忠義の名を留めし大石良雄の奥都城近し

赤穂なる四十七士の義を思ひわが友の身を偲ぶ夜半かな

三国一富士の御山にさも似たる山科山を昇る朝つ日

朝つ日はくまなく照れど暗き世の思ひするかなオリオン星座に

オリオンの星座の開く時を待つ我は闇夜を照らす月光ひかり

山科の春や来にけん窓風に桜の花の匂ひ来るかな

山寺の庭の表に咲き匂ふ桜を窓辺に見つつ楽しむ

長閑なる天地の春を迎へつつオリオン星座に我は澄むなり

働きの庭に笑へる一株の桜の花に春を楽しむ

自動車に送られ都にのほり行く道の辺あかして桜咲くなり

右左躑躅つづじの花の咲きみてる道を走れば心清しも

漸くに小熊の館に着き見ればわが子も孫もしのびて迎ふる

漸くに小熊の館に我つけば空の黒雲日を包み居り

都路に始めて見たるまめ人と目配せしつつ館に入りけり

差入れの弁当うまきお多福屋の表に立てるまめ人なつかし

小熊等にかかへられつつ病める身を狼の間に送られにけり

いぶかしも我が言霊にうたれたる狼目をむき牙をとがらす

雷声を張り上げながら獣の狼鳴きの凄くもあるかな

狼は神の羊をくらはんと舌の剣をふりまはすなり

狼は筆の剣を研ぎすまし噛み殺さんと雄たけびするなり

ままならぬ我身ならずば狼の鋭き舌を砕かんと思ふ

醜虎の穢き心見ゆるかな羊をなやむるさかしらの文

醜虎の送りし筆の剣もて迫り来るかもしづの狼

醜虎の思ふままなる振舞に神の羊のなやむ春の日

ライオンを檻に入れたる心地して言葉の端も恐れおののく

斯うならばこちらのものと狼はうそぶく空に神風の吹く

神風のすがた見えずば狼は餌を得たりと喜びて居り

柔そうに見ゆれど餌に骨ありて噛みなやみ居る醜の狼

わが教の子を喰はんと犬に虎狼ともにほほ笑みて居り

むら肝の心籠めたる狼のたくらみ割れて泡を吹くらん

○といふ掃除夫一人あるありて友のニュースを耳に伝ふる

オリオンの星座はげにもせまけれど太平洋の如く広かり

五大洲に腰を据へたる心地して我はオリオン星座に樂しむ

鉄の扉も窓も知らぬがに広き天地に息する我なり

あらん事をのみ並べ立て迫り来る醜の言霊防ぐ余地なし

点検の声聞きつけて起き上り坐り直して一番と宣る

一番といふ票識をもちながら襟にかけたる一日もなし

オリオンの星座の扉開かれて広場をよぎり接見に行く

接見場にいたりわが子とうち向ひ語るを憚る法廷のさま

簡単なる健否の外になに一つ語るを許さぬ接見係等

暑き日も寒風わたる冬の日も待つ間苦しき接見の折

漸くに順番めぐりて接見場にあたり憚り言葉をひかゆる

これも言ひ彼も言はんと思ひつつ会へば語れぬ接見場かな

係員は耳をそばたててわが言葉一々筆に留めておくなり

(昭和十七年九月 出口うちまる清記)

喬 育

末子『……(略)しかしながらわが君さま、あまりあなたは天然教育とか自然教育とかおつしやつて、二人の子供を気ままに放任しておかれたものだから、松若彦、伊佐彦の老臣にむかひ、傍若無人の暴言を吐き、……お前のやうな骨董品は一時も早く引退した方が国家の利益だとか衆生の幸福だらう……』とか言つたさうですよ。なにほど放任教育がよいといつても、チツとは教誡をあたへてくださらぬと困るぢやありませんか』

国依『子供の教育は母にあるのだ。お前は世のいはゆる良妻賢母だから困るのだ。賢妻良母でなくては本当の教育はできないよ。国依別は教育家でもなければ子守でもなし、家庭教師でもないから、そんなことア畑違ひだよ。しかしあの時代おくれのおやぢ連に、せがれも娘も引退を迫つたといふのか、さすがはおれの子だ、ア、感心々々。この父にしてこの子あり、国依別知己を得たりといふべしだ、アッハ、ハ、ハ、』

末子『ア、困つたことになつたものだなア。まるでわが君さまにむかつては、いかなる箴言も豆腐にかすがひぬかに釘だワ。このままにして放任しておかうものなら、せがれも娘も新しがつて乗馬生活を捨て、両親を捨て、どこへ逐電するか分からないと気がもめてならないのですワ。松若彦もそれが心配でならないといつてゐましたよ』

国依『せがれも娘も乗馬生活を嫌つて、いづれは出るだらう。何といつても、おれの血を受けてる子供だからな。今こそかうして珍の国の国司の仮名にとらはれ、メツキの權威を保つてすましこんでゐるものの、もとをただせば、お勝と巡礼をしてをつた宗彦の成れの果てだ、そのせがれだもの当然だよ。親に似ぬ子は鬼子といふから、おれもヤツパリ誠の子を持つたとみえるワイ、アッハ、、、。オイ末子姫、人間は教育が肝心だよ。教育のやりかたによつて、人物が大きくもなり小さくもなるのだからな』

末子『ホ、、、教育が聞いてあきますワ。あなたの教育の教は獸扁に王の狂でせう』

国依『むろん獸でも王になれば結構だが、しかしおれのいふ教育の教はそんなのではない。森林の中に雲をしのいでそびえ立つ喬木の喬だ。現代のやうな教育のやりかたでは、床の間にかざる盆栽は作れても、柱になる良材は出来ない。野生の杉、ひのき、松などは、すこしも人工をくはへず、惟神のままに成育してゐるから、りつぱな柱となるのだ。今日のやうに児童の性能や天才を無視して、圧迫教育や詰込み教育をほどこし、せつかく大木にならうとする若木に針金を巻いたり、心を摘んだり、つつぱりをかうたりして、小さい鉢に入れてしまふものだから、ろくな人間は一つも出来やしない。惟神にまかして、思ふままに子供を發達させ、智能を伸長させるのが真の教育だ。大魚は小池に棲まず、せがれもよほど人格をねりあげたとみえて、このせまい高砂城が窮屈になつたとみえる。それでこそ世界的人物だ。いや崇敬すべき人格者だ。てもさても神さまのみ恵み、ありがたう感謝いたします』

(以下略)

教育の基礎

近時、国民教育に関する諸問題はその声を高め、皮想外形的方面を脱して、漸次内形的方面に向かひつつあるは誠に慶すべきことなれども、未だもってわが教育の大教大法たる、上は大学より下は小学、幼稚園にいたるまで、一貫したる根本的主義精神にいたりては確立せるものあるを見ず。

維新の初め、にはかに教育制度を更改して欧米に模倣し、一も二もなく時々の流行を追ひ、海外の新学説といふものに盲従し、一時に外観を糊塗粉飾せるに過ぎざるがごときは何ぞや。これをたとふれば、わが国今日の教育事業は、一時応急的普請の工場に幾回となく継ぎ足しにまた継ぎ足しを重ねたるが如し。大屋小屋雑然として尨大なる一区画をなせども、もとこれ始めより一定せる設計ありて起工せられたるにあらざるが故に、間取りの大小、天井の高低等種々雑多にして、迂回曲折して急速の用を弁するに足らず各室各部の人また随意に行動し、主腦者ありといえども、これを統一して事業のなるところははなはだ少なく、到底損益相償ふことあたはざると一般なる観なくんばあらざるなり。

主義精神の確立せざる教育はいたづらに諸多の科目を設けて子弟の脳髓を苦しましむる事多くして、教育の真効果を得ることはなはだ少なし。教育の設備いよいよ進みて子弟の輕佻浮華いよいよ加はるは実に当今

の教育が諸国流行の寄せ集めにして、最初より確立せる設計に基きて経営せられたるに非ざるに原因せずんばあらず。

近時学制改革の議、大いに世人の注意を惹き起こし、諸多の論議陸続として世に出るは喜ぶべき現象たることは勿論なれども、教育の大本たる主義精神の確立するに非ずんば、いかなる良制度も教育の真効果を奏することあたわざるは、從來数回の学制改革の、おほむね皆一時人目を新たにしたるのみに過ぎざりしを見てもこれを知るべし。吾人の信ずるところによれば、今日においてすべからくまづわが日本国教育の大本を確立し、この国家民人本来の主義精神と一致契合せる設計を確定し、これによりて細大の施設と前後緩急の順序とを整へざるべからず。

けだし、わが日本教育の大本を分ちて、

歴史上の基礎

地理上の基礎

倫理上の基礎

国家天職上の基礎

となす。この四者は教育のよって立つべきところのものなり。一切の施設はこの四脚の上に結合せられて全体の構造をなすべきものなり。品性陶冶もこの結構によりて初めて成し得べし、精神教育もこの結構によりて初めてまったかるべし。いやしくもこの四者を外にせる教育は基礎なき教育なり、架空の教育なり。たとへその枝葉の美観をきはむるも、いたづらに外貌虚飾の教育にして、国家進運の本源として深く望みを嘱するに足るべきものにあらざるなり。

（「出口王仁三郎全集」第二巻より）

教育の三大事

日本ではこれをオシエといいますが、オシウは「緒強^{おし}う」である。オは魂の緒で靈魂のこと、教というのは悪い方の魂の緒をだんだんと強いて良くて行くという意味であります。これは悪い方を純化して行く向上的な手段であります。

漢字の「教」は孝文と書きますが、文はあやなり、交りなり、発展なりで、道徳で一番基礎的なものは孝である。つまり親子の愛が一番人間に徹底してわかりやすい。その気が普遍的に、全体的に拡がれば教ができてゆき、世の中はよくなる。そういう意味から、孝という字に文という字が一しょになつていのです。

西洋では educate 引き出す、ということが教育という意味になっています。引き出すというのは神性がすべてのものに備わっている。ただそれが覆われているだけである。神さまから与えられた性、良い方のもの、純なるもの、そういうものを引き出すのが教である。そういう風にいうのであります。とにかく靈魂をより良くしてゆく上の一つの理論である。

われわれの方からいえば、天授の真理が本当の教である。人間的にいうのは間違ったのがある。現代の教育のようなのであります。大変教育が盛になったが、役に立つ者ができぬ。それは天授でないからで

あります。神慮を受ける人、神慮との和合ができる人の教が根幹をなさねば本当の教にはならない。ただ知識を持っているとか、知慧のある人とか、人間的理智の發達している人とか、そういうのは、幾ら勉強し合っても相談し合っても、却って変なものになりやすい。本当の教というものは天授の真理である以上は、より以上の力に触れ得る人、まつりの出来る人、そういう人の言ったことが本になっているものでなければ、本当の教でないということは明かである。今の世が行き詰っている、今の教育がどうも腑に落ちないというのは、天授の真理でないからである。その教の中で一番大切なことを三つほどお話してみたいと思います。

一、感 恩

いろいろな理窟を知ったり言葉を覚えるのは、これは末の末のことです。一番大事なことは、愛というものは、どういうものであるかということを知ること、ありがたい、ということとは、どういうことであるか。誠というものはどういうものであるか、どういう力があるか、そういうことを知ることが一番大事である。いくら七むつかしい哲学を説き理論を説いたところで、それを使う道を知らねば、これは逆になってはいけないのであります。で、教が徹底しなくては行為も徹底しない、徹底さし得ない。であるからして、まつりが徹底しないにしても、この教というものだけは徹底させたいものであります。

愛の一番わかりやすいのは忠孝であります。現代の教育は理窟っぽく、忠孝を教えこむ迫力がない。主に忠、親に孝でない者がいくら世の中に出ても何が出来るのですか。いくらものができて、神心がなく徳がつかない。また奉仕的な犠牲的な気持にもならない、統一的な人にもならない。一口にいえば感恩ということをお教えねばならぬ。このためにはあくまでも鍛錬教育、勤勞教育でなくてはなりません。

二、鍛

鍊

本当のものを作り上げようとするには、それだけ苦しまねばならぬ、それだけ鍛鍊されねばならぬ。今の考え方は楽に大きな所得を得たいという安易な考えが非常に流行しております。本当のものを作りだすには本当の苦しみをしなければいけない。今のように親の腰をかじって遊び半分でものを教え、ものを習っているようなことでは、魂にしみ込んだ何物も得られない。人間を浅薄な浅いものにしてしまう。実地にぶつからねばものが身につかない。

今は知ることだけ一生懸命、頭だけ豊富にしているが腹ができぬ。物でも事でも人でも鍛鍊されたものでなければ本当のものにはならぬ。鍛鍊の途中においては馬鹿げたこと、損をしたように思うこともある。しかし苦勞せず、なぎ、上りに楽にのぼったようなものは駄目である。また上り得ようはずはない。感恩を情とすれば鍛鍊は意である。今はこの二つとも非常になをざりになっている。

情の教育、これがだんだん冷たく薄くなっている。これは一つは鍛鍊ということをやらさぬからであります。水は自然に湧くもの、お日さまは勝手に照るもの、親は勝手に自分を生んでくれたもの、米も麦も自然に生ったもの、そういうふうにも何でもありがた味というものを持たない、恩に感じない。苦しんだ覚えがないから、物をつくった覚えがないから。これではいけない。そういう者にかぎって不平をいい、少し不平が通らず自分が困ると、直ぐに死にたいとかやけくそになる。こういうような人間を何ぼつくったところで駄目である。

三、順

序

も一つ智の方の教育といえ、これは順序を教えること、区別を教えること、物と物との関係を教えることとであります。部分々々を小さく解剖したり比較考究する方、これはものの順序を教えること、順序という言葉を使ったのは、人間はどうしても上と下の区別、左右の区別、天地の間でも序というものがある。序というものが分らぬと、自分と他人との対立関係がわからぬから阿呆なことをしたり、本当の生活、本当の向上というものが出来にくいのであります。自然界の方の順序を調べることは現代でも大分盛んになっていますが、人事上においては、この順序ということが思想的にだんだん乱れて来ております。われも人なり、他人も人なり、中心もへたくれもない、個人的な一列平等的な考えが、西洋の学問の中毒を受けて、近ごろ若い人々の気持の中にはいつている。だから教育を盛にするほど、学校を建てるほど馬鹿な人間が出来てくる。

○

細目に分ければいろいろ出来ましようが、私はこの感恩、鍛錬、順序の三つは天授の真理の中で間違いない、時と所と人とを問わず、どこにほどこしても良いものであると信ずるのであります。そういう大局的な見方、案、策を立てずに、楊枝で重箱の底をはじめるような教のみに力を入れている。これでは世の中がうまく行くはずはないと思います。こういうものを含んだ科学なら、これは本当の教である。が、今の科学はこの中の順序、智に関する或る部分だけをいうのであるから、今の科学は行き詰っている。また、それにもみ囚われており偏している人、社会というものは良いものは出来ない、みな苦しんでいるのであります。要するに祭政一致、祭教一本の根本義に目ざめることが最も肝要なのであります。

(出口日出磨著「信仰叢話」より)

教育私見

今の教育は、どちらかというと、批判力をつける点ではすぐれていますが、その批判はおおむね他に対してで、自分を批判する力を与える点では欠けているように思われます。

人間は自分に対しては甘くできていて、自分の都合のよいように考えるもので、それだけにこの欠点がおきなわれなくては、どこまでいっても世の中は、みなが平安な気持ちで楽しくすごせるということは、ちょっと望めなくなってしまう。

みなが自分の判断で、勝手なことをしたのでは、理屈の上ではわかっていても、人間には感情というものがあります。それが先に立ち、トゲトゲしておもしろくない気持ちたちが自然と生じます。

ことに、お互いが自分の正しいことを主張したり、それぞれの権利ばかりを主張してゆけば、しまいにはどうなるでしょう。みなが気持ちよく暮らしてゆきたいのにもかかわらず、それではお互いが地獄を作りあっているようなものでしょう。

やはり、他を批判すると同時に、自己を批判し、反省することによって、自己をささえてくれている社会環境を、よりよく育てようとする考えが指導されなければなりません。

たとえば古来伝えられてきた謙譲の徳というようなことも、改めて考えてみるべきではないでしょうか。

(出口直日著「こころの帖」より)

お筆先断片考(一)

出口うちまる

「大本神論第一集」の発行を了えたのを機会に、その原本たるお筆先のなかから一部を摘記し、教学研究の資に供したいとおもう。

まずご神名についてであるが、初発のころの筆先にいちばん初めにしたのは「鬼門の金神」「艮の金神」「金神」「八百八光の金神」であり、ついで「月の大神」「日の大神」「天照皇大神宮」「よろずの神」である。

「出雲の大社さま、金勝要の神とご夫婦でござるぞよ。天地の間は金神かまう。地はかねの神さま、いままでは、かげから守りたが、これからは表になりてかまうぞよ」

「大地の金神さまを金勝要の神さまと申すぞよ」

「金比羅さまと竜宮の乙姫さまとご夫婦におなりなさる」

と初発のころの筆先にあるが、経歴の筆先には、

「明治二十五年に初発に、艮の金神が出口なおを氏神さまへ披露して下されと申して、なおをつれ参りたおり、三日目に世にご披露がありたから、艮の金神がお待ち受けいたしておりたら、竜宮の乙姫どのが初発におん歡迎にお出であそばしたが、活発なおん方であるから、こんどいちばんのおん手柄あそばすぞよ」(明37・旧1・11)

とあるので、竜宮の乙姫があらわれたのは最も早く、金勝要の大神については、

「大槻鹿造の家におるおりでありましたが、便所の屋根に金の身体、総体金ばかり、頭は男さんとも女子さんとも分からぬような頭でござりましたが、金の御幣を持ちなされて、地の金神であるが、金勝要の大神と申してくれいとお言葉聞いて、それからは金勝要の大神と申すのぞ」(明

とあり、やはりこのことは初発のことと思われる。

このころには、「伏見の五社大明神」「宇佐八幡」「石原の
「弁天」「福知山の氏神」などの神社の神名が出ており、経
歴の筆先には、明治二十六年旧七月八日、「だるま」さまの
お言葉が出ています。

明治二十七年ころには、天の大神のことを「大神さま」、
月の大神、日の大神のことを「つきひさま」と言われており
明治二十九年には、「天地のおん神さま」として、地の神が
加えられている。

明治二十八年旧七月十日の筆先には、

「日の大神、良の金神の筆先であるぞよ」

とあるが、これは日天使良の金神の意であらうか。

明治二十九年には、早くも、

「このなおのみたまは、もったいなくも、天照皇大神宮ど
のお妹ごのみたまであるぞよ」

と出ているが、稚姫君の命の神名が出るのは、明治三十三年
以後になる。

明治二十九年旧十一月二十九日の筆先に、

「このなおは、良の金神の取次ではあれども、よろずのお
ん神さまがおうつりがあるぞよ」

とあり、その後、天照皇大神宮、金勝要の神、竜宮の乙姫の

神たちの名による筆先も出ている。

明治三十年には、

「地の金神さまを金勝要の神さまと申して下されよ。縁む
すびの神さま、そいたい縁なら、そわしてやるぞよ。また
いやな縁なら切りてもやるぞよ。

竜宮の乙姫さまが、あげにおあがりなされて守護なさるぞ
よ。竜宮の乙姫さまをお願い申せば、着類、食べもの、こ
づかいをおん授けなさるぞよ。

岩の神さま、雨の神さま、荒の神さま、地震の神さま、風
の神さま、これだけの神さまをおん願ひ申せば、この世の
荒れ、地震、のがらしなさるぞよ」(明30・旧7・25)
とある。

「神功皇后」は明治二十九年に、明治三十年には福知山の
「一宮大明神」「御霊さま」の名が出ている。

「ご三体の大神」や「日の出の神」は明治三十二年の旧二
月に、「坤の金神」は同年旧九月に、「国武彦命」は同年旧
十月に、「松岡」(天使)は同年旧十二月に、それぞれ神名
が出されている。

なお同年旧八月十日には、

「清吉どのは、良の金神が日の出の神と名がつけてあるぞ
よ」

とあり、明治三十二年旧八月一日の筆先には、

「うしうどの神、我のつよき神で手にあわぬ神でありたが、うしうどの神でも往生いたしたぞよ」

とあり、「うしうどの神」は靈界物語第三十八巻「曲の猛」のなかにその名が出ている。

つぎに、「みろくの世」「水晶魂」は明治二十七年ころ、

「松の世」「やまと魂」は明治二十八年ころからの筆先にある、「教祖」という言葉については、

「この教祖は人のいやがることばかり申すぞよ」

と明治三十年の筆先にある。

明治二十九年、同三十年の筆先には、

「明治三十年で世がかわるぞよ」

「三十年が世の切りかえであるぞよ」

などとししばしば出されているが、「世が変わりて、明治三十年から金神の世になりたゆえ、良の金神の大本で……」（明34・旧7・16）とあるところから見れば、明治三十年から神界では良の金神の世になりたというべきであろうか。

おだまう
「雌松」や「おひねり」のことや、「七月七日の集会」の

ことは明治三十一年に、「岩戸開き」という言葉は明治三十二年ころから出ておる。

なお、明治三十一年旧十一月二十二日の筆先に、

「神、表になりたら、なにごとも三日の願いをして下されよ。まことの心で願うてきたなれば、三日に利やくをやるぞよ」

とあり、これは「大本神諭第一集」には掲載されていないが、後に補遺として加えられるはずである。今日は大体一週間の祈願が標準となっているが、三日間でおかけを頂けるほどに、われわれの信仰を向上さしていただきたいものである。

お筆先や大本神諭は、「大本七十年史」など大本の史実と併読すれば、非常によく理解ができる。

以上は明治三十二年までの筆先の摘録である。

明治三十三年以降の筆先については次回にゆずることしたい。

出口聖師の言葉を研鑽する (1)

大 国 以 都 雄

昭和二十年十二月、出口聖師は鳥取県の吉岡温泉に滞在中大阪朝日の記者と対談され、その談話が同新聞に発表されたその中に、

「これからは神道の考え方が変わってくるだろう。国教としての神道がやかましくいわれていたが、これはいままでの解釈が間違っていたもので、民主主義でも神に変わりがあつたわけではない。ただほんとうの存在を忘れ、自分の都合のよい神社を偶像化して、これを国民に無理に崇拜させたことが日本を誤らせた。ことに日本の官・国幣社の祭神が神様でなく、ただの人間を祀っていることが間違いの根本だった」

とある。これはまことに日本の神道、神観の立替え立直しを主張された大問題である。敗戦当時の非常な混乱期にあつて発表されたのであるから、神とか神道とかの問題より、先ず

生きねばならなかった当時としては、一般国民は、つい生命をつなぐことに懸命で、この問題にはあまり心をとめなかつたとみえるが、今日、静かに考えてみると、聖師のそつちよくな大胆な言葉が大きく響いてくるのである。

「神道の考え方が変わる」ということは、過去の日本の歴史と、その歴史のバック・ボーンとなっていた神社神道の本質が変わってくるということであろう。「これは今までの解釈が間違っていたもので……」となると、どう解釈が間違っていたのか、あらためて検討されなくてはならない。「ただほんとうの存在を忘れ、自分に都合のよい神社を偶像化してこれを国民に無理に崇拜させたことが日本を誤らせた」というのは、どういう意味だろう。「真実の存在」が忘れられたその真実の存在とは何神を意味するのか。

ほんとうの存在、すなわちまことの神とは、宇宙唯一の真

神のことであろう。その真神を忘却して、都合のよい神社を偶像化して、これを国民に崇拜させた。それが日本を誤らしめた本であるというのであるから、都合のよい「神社の偶像化」とは、そもそも何神社であろうか。さらに「ことに日本の官・国幣社の祭神が神様でなく、ただの人間を祀っていることが間違った根本だった」。実に手きびしく直言されたものである。歴史上の人物や、徳望家、英雄偉人とその地域の人から崇められた人、あるいはその土地の領主、殿様という人々の霊を神社形式に祀ってあったのにたいし、いつのまにか官・国幣社としての位置が贈られ、それらを崇拜することが国民の義務であり、また日本国家の伝統的精神の淵源であるとされた。そのことが、何かの間違いとなり、真実が失なわれてゆくことになったと言われたのであろうか。

もちろん英雄や偉人、徳望家や功績のあった者を、神社形式に祀ることに異議があろうはずはない。日本は古来、祖先なりその他の歴史的人物を祀るに神社形式をもちいたことは伝統的で一つの習慣でもあった。しかし、それはそれとして真の神と同等に、あるいはそれ以上の権威を贈り崇めさせるということは本末顛倒であり、神的順序の破壊である。ことに人霊の祭祀が国民の信仰の依立する淵源でもあるがごとく教育され、強いられたとすると、そこに間違いが発生してくる。

国家はかつて歴史的人物の神社にたいし、贈位して神格化した。そして国家の事あるたびに勅使または幣帛使をおくって、それらの神社に参向せしめ、祈願させた。官幣大・中・小社、国幣大・中・小社など、ことごとく神格化された国家の公的神社であった。そうして真の神よりも上位の神社になりあがり、真の神の社格は下位にあつかわれ、また社格すら与えられないものもあった。天地創造の本源神は官幣社の中にはほとんど無い。こうした人霊神社によって国家はその守護を得、その営みがおこなわれていたといえる。極端な言葉でいえば、贈位や社格を与えられたことによって、神格化され上下の順序が変わってしまった。したがって天地惟神の神観が変造された。人霊と神との差がなくなり、場合によっては神よりも人霊が尊崇されるようになった。そして、それがあたかも真の信仰の源泉であるごとく錯覚させられたのである。

祖霊を祭祀することは正しいことで、当然の義務である。

しかし、祖霊を祭祀することが「信仰」にはならない。「信仰」の対照物は真の神でなくてはならない。祖霊を祭祀しておれば、それ以外に神を祀る必要はない、祖霊祭祀が信仰であるという考えがありとすれば、それは大きな間違いである。「信仰」と祖霊祭祀とは別のものである。もし神と祖霊とを混同し、祖霊を神とすりかえるようなことになると、それは

偽信である。靈界物語によって教えられるごとく「信の真」と「信の偽」とをよくわきまえなくてはならない。人霊を神とし、真の神を疎外する信仰は、「信の偽」であり、そこには内流は無い。

信仰は神幽頭三界を貫くものでなくてはならない。現世だけの信仰は、なりたつごとくしてなりたない。信仰は永遠の基盤に立たなくてはならない。真の神は神幽頭を一貫した一切生命の本源である。ゆえに真の神を信仰することは、信仰の第一義である。そこに永遠があり、本源帰向の人に本然する神性の開顕がある。いかなる英雄偉人、徳望家といえども人であるかぎり、神幽の世界では、神の定められた神的順序に従わなくてはならない。天国において日と現われ、靈国において月と現われ給う大神の下に、一切は摂取され統一され、厳然とした順序のもとに整理されるのである。現実の世界で、いかに神格化され、贈位によって高い位置が与えられていたといえど、それがそのまま神界には通用しないのである。

現界の格式位置が通用する神界、幽界または天国というものは全然どこにもない。このことは、靈界物語に懇切に教示されている。したがって人霊神社信仰の世界と、神界・幽界の世界とは、何等の連続もなく、断絶した別個の世界であるといえる。

昔、藤原氏とか平氏とか源氏とかいう姓の始祖にたいし、神社形式の祭儀を営み、その氏の子たちが崇拝したものが、いつの間にか「氏の上」「氏神」となり、いわゆるその地域支配守護の神と錯覚されて、「うじ神様」として、氏の系統のものともより、そうでないものでも参拝し、いつの間にか信仰の対照とまで変遷してきているものもある。これらは氏族時代の発展において、勢いのおもむくところ、ついに神格化され地域的な意味をもったのであろうが、氏族時代が終った今日においては、もっとよく考えられなくてはならない。それは歴史的の遺物としての神社であり、あるいは「氏の子」たちが、崇敬するのであれば問題はないが、それが産土の神と混同されて、地域守護の神として、信仰的な奉仕までも強要される慣習が、いまなお存続していることは、整理されなくてはならぬ。

さらに一例をあげてみる。徳川家康を祀った日光の東照宮のごとき、徳川系統の血族や、それらに従属する子孫のものには東照宮は太陽に擬した最高の神社名であり、家康は始祖として「神君」として、最高の神格化の名称を使用するのであろうが、しかし、そうでない、むしろ家康と戦った家系の人々からいえば、何の東照宮ぞ、何の神君ぞといえる。それを国家が贈位し、官幣化すると、全国民は崇拝しなくてはならない義務を負うことになり、信仰的思想に混迷を生ぜしめ

る。

東照宮は別格官幣社である。家康の遺骸を駿河の久能山からここに改葬した。いえば墓所である。構造は神社形式と寺院形式の混合したもので、社格としては別格官幣社である。

こういうように徳川時代の領主、すなわち殿様の関係には廟(びよう)即墓所が神社となっているものが相当に多い。

兵庫県の神戸には湊川神社がある。「嗚呼忠臣楠子之墓」で、正成公と共に正行以下楠公一族、摂社には公の夫人などが祀られてある。これも別格官幣社である。

神社の戸籍調べをするのではないから、ただ一例として祭神が人霊であっても、格式が与えられると神社として国民崇敬の「神」となり、そこに「神」という特別の信仰となって真の神との混同がおこなわれてくることに注意が必要である。日本の神社のことをあまりせんさくすると、また抗議が出て、いろいろ問題となるから、ここでは片鱗をのべておくことにし、神社神道が、他の民族からどういうように考えられており、またその影響がどうであったかについて、かつての満州国の例をとって、聖師の言葉の「自分の都合のよい神社を偶像化して、これを無理に崇拜させたことが日本を誤らせた」といわれた証明にしてみよう。

大本はかつて他民族、他国にたいする宗教のありかたとして、万教同根、人類愛善を基本的宣教活動とした。したがっ

て他の宗教を廃棄せしめ、あるいは従属せしめるという態度はとらなかつた。満州国の建国に当つても、満州に既存していた宗教とは、万教同根の精神に立つて、相互に提携し、協力した。満州には五族があつたというが、それぞれの民族が先祖より持続して来た宗教があり、したがって宗教的精神生活のありかたにも、異っていたものがあつた。そのため宗教と宗教の相互のあつれきや紛争もあつた。しかし大本が万教同根、人類愛善の旗印しをにかけて接触すると、すべての宗教が和やかに手を差ししのべ、共に地上天国建設のために力をつくす約束をしたのである。このことは大本七十年史に明らかにされている。

ところが、この大本の進出、すなわち宗教的な活動に対し心よからず、むしろ憎悪に似た感情をもって見ていたのが一部の神社神道人である。そこに宗教的に潜在したみにくいあつれきがあつた。大本はそのことは何んとも考えなかったが彼らは日本の国策に水をさす大本だとして、あらゆる機会をとらえ大本の悪口を内地に報告した。大本事件の裏面にはこうした神社神道人の大本憎悪の一項が潜在していたことを知らねばならない。

日本の大陸に対する国策の一つである宗教政策には

「帝国ハ東亜新秩序建設ノ成果ニ照応シテ必要ナル神社ハ積極的ニ之ヲ帝国又ハ帝国臣民ニ於テ設置シ、支那人ヲモ

包容スル如ク措置シ、更ニ万全ノ措置トシテハ支那ニ於テ帝国ノ神祇ヲ奉斎スル神社ハ総テ帝国ノ法令ニ依ルニ非サレバ之ヲ設置シ得ス。且神社ニ関スル行政ハ総テ帝国力之ヲ行フモノナルコトヲ支那ヲシテ承認セシメ置クヲ要ス」これが、日本の神社神道を宗教として国策の一線に進出せしめる基本方針で、大陸政策の一つであつた。そしてその方針をさらに強化発展せしめて、

「支那ニ於ケル寺廟孔子ノ文廟ノ如キハ、支那ニ於ケル一切ノ宗教ト共ニ、東亜新秩序ノ中枢ニシテ新支那誕生ノ原動力タル皇威ノ下ニ、始メテ其信仰ノ自由ヲ享有シ得ルモノナルヲ以テ、執レモ帝国ノ神祇ヲ奉斎スル神社ノ神威ノ下ニアルモノニシテ、到底神社ト同一ニ断スベキニアラズ」日本の神社神道の下において、はじめて信仰の自由が認められるものであるという日本の宗教政策に対し、他の民族がどうして承認することができるだろうか。こういう日本の政策は、信教自由の原則にたつ各国、各民族は、これこそ宗教侵略であると反撃するのは当然のことである。日本人が大陸に定住し、日本人だけの信仰として神社を営むことは、協定されるなら結構であるが、頭から神社の威徳の下において汝らの宗教の自由は認めると制限し、条件をつけたゆきかたでは、他民族から反感を買う以外何ものもない。

元、満州国の元首、溥儀は「わが半生」の中に左のような

悲痛な心境を書いている。

——一九四〇年（昭和十五）五月、二度目に日本を訪問したとき、吉岡某が書いた文書を、日本の天皇の前で読みあげるよう強要された。「日滿一徳一心、分割しえぬ關係を体现するため私は日本の天照大神を満州国にお迎えして奉祀することを希望いたします」というのであつた。そして日本の天皇からイミテーションの「三種の神器」をわたされた。

と書いている。このことが強制的であり、問答無用の圧力によつて行なわれたのであつた。「紫禁城から盗み出したいろいろのものを見ても、どれ一つとしても、これより以上の値打ちがある。それなのに、これが神聖不可侵の大神だろうか帰国の車のなかで、私は泣けてこらえることができなかった」と告白している。そうしてその結果は建国神廟の建設がおこなわれ、「国本奠定の詔書」が發布される段取りになつた。この詔書は佐藤某の作文である。

「朕、茲に敬んで建国神廟を建て、以て国本を悠久に奠め国綱を無疆に張り、尔衆庶に詔して曰く、我が国は建国より以来邦基ますます固まり、邦運ますます興り、烝烝として日に隆治にのぼる。その淵源を仰ぎこの不績を念うに、みな天照大神の神佑、天皇陛下の保佑に頼らざるはなし」こうして溥儀は泣く泣く神位に拝礼せしめられた。銃剣を

つきつけられての信仰の強要であるから、表面はうやうやしく礼をとったが内面の精神は全然ことなっていた。

「神廟に出かける前には、まず家で自分の祖宗に一度叩頭した。神廟に着いては、天照大神の神位に向っても、心の中では、これは天照大神を拝んでいるのではない。北京の坤寧宮^{くんにやう}を拝んでいるのだ」と。

この告白を、今日われわれは読んでどういう気持がするか日本のやりかたは正しかったと考えるだろうか。それとも宗教政策の誤りだと考えるだろうか。歴史は、支配者が健在な時は、どんなにでも正義化されるが、一たん支配が破れると正体を現わして、後世にはその真実を伝えて批判が加えられるものである。「わが半生」は各国の歴史家によって、日本侵略の宗教謀略として理解されていることに、われわれは注目しなくてはならない。

一九〇六年、日露戦争後、南満州鉄道の利権を獲得した日本は、満州を植民地として大陸進出の政策を進めた。その政策に添うて「大陸の開発に着手して以来、その居留地に逐次奥地にまで神社が鎮祭されていった」（「神社本庁十年史」参照）。一九四〇年の調べでは満州に神社が一三七社がありその祭神は天照大神を祭ったものが一二七社、明治天皇が七四社ある。その他、神武天皇、応神天皇、大国主命、金山毘古、金山毘女命を祀っている。

この祭神のありかたについて、日本人は、神社神道になれきっているから、何の疑義も持たぬであろうが、他国のもの民族の異なるものからは植民地侵略としかうけとれないのである。日本人は、天皇は神であり絶対神聖であると信じさせられていたから、神として祀り、外国にでも神霊を持って行って神社を建て、祭神とするに何の疑義も感じないであろう。しかし他民族、他国のものは歴史が異なっているごとく、他国の元首だったものを神として崇拝せよといっても、誰も承知しないことは当然である。人類共通の万有創造の根元、一切の原因元霊を神として祭るのであれば、その形式は異っていても、他国、他民族も納得するであろう。信仰は人の靈魂に關係する根深いものであるから、他民族に対したときは余程の配慮が必要である。

宗教と権力・政治にたいする世界の紛争の歴史と教訓は人類の社会に厳しい深刻な反省を要請していることを忘れてはならない。大本は、したがって万教同根、人類愛善のもとに他民族に接し、相提携した。そこには宗教的な反目あつれきはなく、相互に地上天国建設への共同目標に協力するという状態であった。自己の宗教に従属せしめ、その宗教の下に信仰の自由があるという思いあがった支配的な優越観は持たなかった。

出口聖師はその点について「神社を偶像化して、これを無

理に崇拜させたことが日本を誤らせた」と明確に指摘されたのである。

以上は、神社神道の他民族の世界へ進出した一部を例にあげたにすぎない。もう一度くりかえしてみると、「寺廟孔子の文廟、また支那における一切の宗教は、日本の皇威の下に始めて、その信仰の自由がえられるのだから、日本の神社の下に従属するもので、神社と肩をならべるものではない」という日本の宗教政策は、到底認容することはできないのであった。こういう日本の宗教政策を、世界の政治家、宗教者、歴史家が見たらどう批判するであろうか。きっと日本は野蛮な、ルネサンス以前の宗教思想国家だと評価するだろう。

「建国神廟始末記」には、一九四五年八月、日本軍の全面降伏の報で満州の重臣たちはあわてふためき、神廟に祭った鏡と剣を、外島祭務所長、橋本総裁等が奉じて奉天まで逃げたが、ついにソ連軍に捕えられたので「意を決して、この御霊代から御神霊の昇神を願ひ、御霊代は南湖の湖底深く沈め奉る」と書いてある。そして「王道楽土、五族共和の夢は空しく、建国わずか十年余、遂に滅亡に遭遇してしまったのである。アア神に見離された民族の行方？」と結んでいるが、「神に見離された民族」とは、いずれの民族を指すのだろうか。ある新刊書にはこのことを評して「まさに侵略の神々は被侵略民族の怒りの炎に焼かれ、民族解放を勝ちえた大歓声

の嵐の前に、海底深く沈まざるをえない運命であったのである」と批判している。

以上の例証は、決して神社神道を非難するためにあげた例ではない。ここで考えてもらいたいのは、まことの神と、神社神道が神とする神との格差のことである。神社神道の神観が正しいというのであれば、その正しいという理論が聞きたいのである。人霊と神との明確な観念および、神界、幽界にもおよぶ永遠性にたつ神観である。

創られた神と創った神との神格は当然ことになっている。つくられた神が、つくった神の上位となり、神格化されるといふことは、どういうことであろうか。

仏教では人が死んだら仏としてまつり、神道では人が死んだら神霊として祀る。これは日本の長い間の習慣的宗教行為である。そのことを私はとやかくいうのではない。ただ人の死後、その霊を神式に祀り神霊とされ、さらに発展して神格化されて、ついには天地創造の神よりも上位に祭りあげられる神観というものが誤りではないかというのである。出口聖師は「偶像化」の言葉をつかわれたのであるが、「これからは神道の考え方が変わってくるだろう」と言われた言葉と合わせ考える必要があり、意味の深い言葉である。

一九三九年、平沼内閣が宗教団体法案を提出し、その提案理由説明の中に、

「宗教によって我が国体観念、我が皇道精神を涵養するといふことが、日本に行はる宗教としては最も大事なことであると考へるのであります。ついてはこれに国家と致しまして保護を加へることは是非やらねばならぬことである。これと同時に宗教の横道に走るといふことは防止しなければならぬ」

といい、時の宗務局長は、

「もし宗教団体或は教師等が教義の上から、わが国において神社参拝を拒むような、あるいは人を参拝させないやうな、もしそういう不料簡な真似をするやうでございますれば、それは明らかに安寧秩序を紊す者である。少くとも公益を害するといったやうなことに相成らうと存じますのでその点はひとつ本法によって厳に律して行きたい云々」

「宗教によって我が国体観念、我が皇道精神を涵養するといふことが、日本に行はる宗教として最も大事なこと」とは、おどろくべき独善偏狭な宗教観念であることよ。

また「宗教団体或は教師が教義の上から、神社参拝を拒むような、人々を参拝させないような……それは安寧秩序を紊す者」という考え方は、恐ろしい独裁観念で野蠻国の官僚の思想である。こういう考え方が神社神道をささえ、そして国民におしつけ、すこしでもこれを批判するものは治安を紊すものとして、はなはだしい時は投獄された。第二次大本事件

には、こうした背景が大きくものをいっていた。

いったい、神社は宗教だろうか、宗教には祭るべき神、すなわち信仰の対照となる神と、その神と人との関係における祭儀と、そして教化育成の教義がなくてはならぬ。神社には祀る神霊はある。祭る儀式はある。しかし教義といえるものはない。だから古くから神社は宗教に非ずという議論があった。古い時代からの習慣によって行事がおこなわれているにすぎない。それを宗教といひはると世界の宗教と対決した時にどうなるというだろうか。日本独自の宗教で、世界の宗教のレベルとはちがひ、同一に論じては困るというのであればそれでよいが、今日では世界性のない、人類に共通する理念が成り立たぬ宗教は、もはや宗教の広場からは脱落させられているはずである。

日本は敗戦によってマックアースーの進駐となり、神道追放令によって、国体護持皇道精神の神道は宗教に非ずと追放された。そしてかかる基本法であった宗教団体法は廃棄せられた。その結果、日本に始めて信教の自由が確立した。皮肉なことで、日本の敗戦が真の宗教の復活となったことは、よるこんでよいことであるが、また悲劇でもある。

どういふ神さまを拝んでいるか

桜井重雄

時どき、わたくしは信者に「どういふ神さまを拝んでいますか？」と質問することがある。その結果、わたくしとして感ずることは、どうも皆がそれぞれヒキヒキの神さまを拝んでいるような気がする。言葉をかえていえば、同じ信者同士の間に一種の派閥をつくっているような感じがするのである。

大本教法第一章（祭神）には、

「大本は、天地万有を生成化育したもう靈力体の大元靈にまします独一真神をはじめ奉り大地を修理固成したまえる祖神厳靈国常立尊、瑞靈豊雲野尊その他もろもの天使を大本皇大神と仰ぎて斎きまつる」

と示されているので、これには誰も異議をさしはさむものはないが、最上天界すなわち高天原には、宇宙の造物主なる大國常立の大神（またのみ名、天之御中主の大神、またのみ名

天照皇大神）が天地万有一さいの総統権を具足して神臨したもうたのである。ちなみに宇宙の造物主を大國常立大神、天之御中主大神あるいは天照皇大神ととなえ奉るのは、宇宙の造物主が三神いますわけではなく、神道においてはお働きのよって神名がついているので、靈力体の靈を主にして申し上げるときは天之御中主大神ととなえ、力を主にして申し上げるときは大國常立大神ととなえ、体を主にして申し上げるときは天照皇大神ととなえるのである。

ここまでは別にどうということはないのであるが、「靈界物語」第四十七卷「舍身活躍」戌の巻の総説には、次のように示されている。

「大六合常立の大神は独一真神にして、宇宙一さいを主管したまい、厳のみ魂の大神と顕現したまいました。

さて、厳のみ魂に属する一切のものは、悉皆瑞のみ魂に属

せしめ給うたのでありますから、瑞のみ魂は、すなわち嚴のみ魂同体神ということになるのであります。ゆえに、嚴のみ魂を太元神となえまつり、瑞のみ魂を救世神、または救いの神と称え、または主(す)の神と単称するのであります。ゆえに、この物語において主の神とあるは、神素蓋鳴の大神さまのことであります……………。

しかして前に述べたとおり、宇宙一さいの大権は嚴のみ魂の大神、すなわち太元神に属し、この太元神に属せる一さいは瑞のみ魂に悉皆属されたる以上は、神を三分して考えることはできぬ。つまり心に三を念じて、口に一をいうことはならないのであります。ゆえに、神素蓋鳴の大神は救世神ともいい、ミロクの大神とも申し上げ、撞(つき)の大神とも申し上げるのであります」

スエーデンボルグは「真のキリスト教」の中で、心に三を念じて口に一をいうような信仰を「精神異常」と名づけている。この精神異常が全神学に侵入し、また教会に侵入している。「これが今日世界に流布する唯物論の根源である。何となれば、口に一神をいい、心に三を念ずるならば、これらの二つは互いに破壊的になるのではないか」と彼は言っている。大本教学において、独一真神が二元になって嚴のみ魂の大神、瑞のみ魂の大神とあらわれ給う場合の受けとり方である。大本七十余年の歴史を見ても、「男子と女子との戦いで、世

界にあることを大本の中で見せてある」という事実がある。大本には「経の教を説かれる役」すなわち開祖と「緯の教を説かれる役」出口聖師の二人を教祖と仰いでいる。系統というか、性格というか、古い役員の中にも開祖を信奉する人々と聖師を信奉する人々とあったらしい。

開祖は嚴の御魂で一々厳格である。たとえば開祖は八十歳以上の老齢になられて、嚴寒の最中ご神務をとられるので、役員が火鉢を持って行っても、決しておあたりにならなかったということである。開祖のお考え、ヤリ方は、神さまの御用を火鉢にあたりながらさしていたくのは勿体ないというのである。出口聖師は「わたしのは考え方が違ふのや。せっかく火鉢を持って来てくれたのに灰にしてしまうのは勿体ないのであたるのや」といわれた。

同じ「勿体ない」というのでも、開祖と聖師とはその考え方、ヤリ方が違ふのである。世の中には、開祖の考え方、ヤリ方と聖師の考え方、ヤリ方があるわけである。これがいつも争っているのである。たとえば甲は「そういうことは絶対に許せない」と強く主張すると、乙は「君みたいに、そんな融通のきかないことを言っていたら仕事にならないではないか」といつて反対する。同じ「勿体ない」ということでも、考え方やリ方に相違があるわけである。

開祖は嚴の御魂として現われ、聖師は瑞の御魂として現わ

れたのであるが、大正七年十一月開祖のご昇天後、聖師のお働きは厳と瑞とを兼ねた伊都能売^{いづのめ}の御魂として顕現されたのである。大本の教は「之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ之ヲ中外ニ施シテ悖ラザル惟神の大道」である。

二

神界が混乱し四分五裂の状態になったのにいろいろな原因はあるが、国常立尊の系統と盤古大神塩長彦命の系統と大自在天大國彦命の系統が三つ巴となって争うに至ったことは「靈界物語」に明かに示されている。

盤古大神は、きわめて柔順なる神にましまして、決して悪神ではなく、多くの神より多大の望みを囑されていたもうた神である。

大自在天大國彦命も、大國主神の御事であつて武力絶倫の神にましまして、国平矛^{くにむけのほと}を天孫にたてまつり、君臣の大義を明らかにし、忠誠の道をよく守られた神である。

「靈界物語」第四十九卷（真善美愛）子の巻第五章「復命」には、河鹿峠の峻坂を越え、ふところ谷に暴風をふせぐおり、山ざるの群れにおそわれて目をきずつけた玉国別が神殿を三社建てられた。中央には国治立尊、日の大神、月の大神がまつられ、左のわきには大自在天大國彦命、ならびに盤古大神塩長彦神を鎮祭し、右がわには山口の神をはじめ、八

百よろずの神々を鎮祭された。

この祭典がすむと同時に、玉国別の眼病は全快し、顔の少しく、形まで変わっていたのが、以前にましますます円満の相となり、にわかに神格がそなわつて來たように示されている。

大自在天大國彦命や盤古大神塩長彦命が邪神ならば、玉国別が神殿をつくつてこれを鎮祭するはずはないわけである。ただここで注意すべきは、神は順序にましますので、玉国別は中央に国治立尊（国常立尊）、日の大神、月の大神をまつられ、左のわきに大自在天大國彦命と盤古大神を鎮祭し、右のわきに山口の神をはじめ八百万の神々を鎮祭されたのである。

この山口の神とはどういう神か。神祇辞典などをひいてもこういう神は見出すことはできないが、これはおそらく「出」という字の半分をとつたもので「出口の神」という意味ではないだろうか。これはわたくしの独断で、そうだというわけではないが、やはり、現在大本では「惟神真道弥大出口国直靈主命」の神号を唱えている。

ここで、大本教法第一章（祭神）に、「大本は、天地万有を生成化有したもう靈力体の大元靈にまします独一真神をはじめ奉り大地を修理固成したまえる祖神嚴靈国常立尊、瑞靈豐雲野尊その他もろもろの天使を大本皇大神と仰ぎて齋きま

つる」と示されていることで、特に「大地を修理固成したまえる祖神厳靈国常立尊、瑞靈豊雲野尊」と御神名を挙げていることに注目すべきである。普通ならば「独一真神をはじめ奉りその他もろもろの天使を大本皇大神と仰ぎ云々」でよいわけである。特に大地の祖神のご神名を明示したところに大本神観の特色がある。

キリスト教では「ああ天の父よ」と唱えるが「地の母よ」とは言わない。地の母は天の父の中に含まれているのである。大本では大地を修理固成したまえる祖神、すなわち国祖の顕現されたことが非常に重要になってくるのである。

大本では、独一真神をはじめ奉り八百万の天使を尊敬するのである。もちろん、正神界の神々のことである。出口聖師は「神を敬愛するごとく、すべての人々を敬愛し、また自己を敬愛すべし」と教えられている。

大自在天国彦命は、天王星より地上に降臨した豪勇の神であり、盤古大神塩長彦命は日の大神の直系であって、いずれも善神界の神々であるから、それ相応に敬愛すべき神である系統（ひっぽう）というのはおそろしいもので、大自在天国彦命の系統はどうしても、大自在天を擁立しようとし、盤古大神の系統はどうして盤古大神を擁立しようとするに至るもので、何というか、腹の虫というか、守護神というか、ちょっと理屈では説明できないものがある。神論にも「系統

のものが話すとわかる」という意味のことが示されている。同じことを言って話すにしても、甲の人より乙のの方がよいという場合がある。また、この人には乙の人より丙のの方がよいという場合もある。それぞれ人々には、ヒイキヒイキの神さまがあるわけである。

これが、知らず知らず何時となく派閥を生じて、そこには争いが始まるのである。

一軒の家にしても、「わたくしは旦那さんの方がよい」

「いや、奥さんの方がよい」、「僕は長男の方がよい」「次男の方がよい」「姉さんの方がよい」「何といたって妹さんの方がよい」——こんなことになったら、取り巻き連が多かったら、お家騒動みたいなことになってしまう。

三

「ひいきの引き倒し」という諺がある。ひいきもよいが、「引き倒し」になっては、かえって迷惑千万である。

神代においても、天照大御神と須佐之男命との間の誓約が行われた時に「ひいきの引き倒し」のようなことがあった。

「靈界物語」（第十二巻）——古事記略解の中に示されているが、須佐之男の命は変性女子で、天照大御神は変性男子であることが明かになって須佐之男命の潔白が証明された。物語にはこう示されている。

『これによりて言さば自ら我勝ちぬ、と言ひて、勝さびに天照大御神の宮田みやうだの畔離あはなち、溝埋みぞうめ、亦其の大嘗聞はたへきこし召す殿に尿うまり散らしき』

「この言葉少ないけれども、この意味は、当時、須佐之男命さまにもなお、たくさんの臣下があった。ここに須佐之男命に反対する者と、味方するものと出来て来たので迷いが起こったのであります。須佐之男命がお勝ちになって、増長なさったというよりも、むしろ私のきれいな心はわかった筈である、しかるに、なお悪いと仰せになるのは心地が悪い、不快であるというので、ついに自暴自棄に陥ったのであります。やけくそを起こした結果が、田の畦あぜをこわしたり、溝を埋めたり、お食事をなさる所へクソをやり散して、いろいろ乱暴のあらんかぎり、須佐男命に味方する系統の者が行なったのであります。云々」

須佐男命がヤケクソを起こして暴れたように表面は書かれているが、実際はその系統の者がやったのである。

これが天の岩戸がくれの原因となつて、大変なことになつたのである。そして岩戸を閉めたものは大勢なので、贖罪者を立てねばならぬことになつて、建速須左之男命お一柱らに罪をおわして、ヒゲを斬り、手足のツメをも抜き取りて根の堅洲の国へ追い退けたのである。須佐之男命の系統のものたちが「ひいきの引き倒し」をして須佐之男の命を罪人にして

しまったのである。

恐いのは、この系統の取り巻き連である。「敵の中にも味方あり、味方の中にも敵がある」という諺のとおり、味方をする系統の者のためにヒドイ目にあうことがある。派閥ぐらい醜いものはない。

現代は民主主義の時代であるから、何ごとも多数決によつてきめてしまうようになったが、多数が正しいことも、もちろんあるが、多数が必ずしも正しいといえない場合もある。数ばかりでは決められない、質しつということも大事である。衆愚しゆぐという言葉があるくらい、ただわいワイ附和雷同する連中の勢力が強くなつたら、おかしいことになる。

大本神論（大正八年三月七日旧二月六日）には、こう示されている。

「今の日本の人民は肝心の国体の精神を忘れて、外国の精神に誑おどろされてしまつてゐるから、日本の国では絶対に天地が潰れても用いられん、民主主義を唱える鼻高が出来てきて何も知らぬ日本の人民が学者の申すことを信じて、それに附和雷同してつまらんことを致すように曇りてしまつてゐるから、今が世界の正念場であるから、神が永らく苦勞いたして、人民に氣を附けるのであるぞよ」

「日本の国では絶対に天地が潰れても用いられん」という強い表現で示されていることに注意しなければならない。

「野に遺賢無からしむ」という言葉があるが、案外表面に出ていない人々の中に秀れた考えをもっている人があるものである。

「このころの帖」には、

「民主主義はけっこうなことです。わずかな保証のもとに人間の自由が、極度に、圧迫されるようなことはかないません。けれども、民主主義の名のもとに、まだ目も充分に開いてないような人々が、付和雷同して、勝手なことをするのはこまります。まず何よりも、厳しく自分を、つくってゆくことが大事で、たえず、そういう教育の行なわれる裏付けをもった民主主義がけっこうだとおもいます」と記されています。

全学連の騒動なども、民主主義の善い面と悪い面がハッキリ

り出ているように感じる。

神さまも大体議論が好きだと見えて、祝詞にも「八百万の神たちを神集へに集へたまひ、神議りに議りたまひて云々」と示されているが、根本の大事なことは「おほもとすめおほはかみ大天主大神の命もちて」とある点である。常世会議みたいに、ただ議論ばかりしていたのではつまらないということである。

“Under God”（神のもとに）ということをお忘れ民主主義は、百害あって一利もないということである。東京の或る友人が「よい意味で教団も若返って呉れるとよろしいが、いささか年配不足が思いやられます」と言ってよこした。

最後に「あなたはこういう神さまを拝んでいますか？」という質問を呈出して、この稿を終わりたい。

世界経綸の二大根本義

出口聖師は地球が混乱するのは二大根本義が不明であるからと喝破されている。

一、人生の根本義

即ち人類は現世界に如何なる使命を帯び、如何なる必要ありて生まるるものなるか。

二、天地間組織経綸

天地創造の因縁、天地間の活動的経綸と人間との關係如何。

二大根本義は「宇宙の真相」と「人生の本義」のことで、このことが開明されたときに、はじめて真の宗教、真の政治、真の教育等々がおこなわれて、治国安民の経綸の実が、あがり地上に樂土が具現することになる。

○大本神諭は二大根本義の断案

木庭次守

古来の賢哲、英雄、思想家等が各自に理想とした理念を実行したことによって、治国安民の実をあげたものが一として無いことは、古今の歴史がこれを証明して余りがあり、聖師さまは、人類の歴史を暗黒史といわれたほどである。

帝國主義、社会主義、民主主義、民本主義、自由主義、個人主義、共產主義、世界主義等と称したのも、すべて失敗にきいたといつても過言ではない。

この点において、大本神諭は、神眼によって、二大根本義に神明の断案を降されたものである。しかし地上の天人にます大本開祖に相応して、啓示されたために、一般の人々には理解しがたきために、ここにミロクの救世主を降して、この神諭の真意を解明されることとなった。

○宇宙唯一の宝典―靈界物語

天地の神に依託されて、大本神論を説明するために、高熊山の神山において、宇宙一切の真相を神慮により胎蔵して、綾の地の高天原に降った大真人出口王仁三郎聖師は、二十五年間を実験に実験を重ね、誤まりなきを実証した上、神意に従って、大本神論の眞解を人類に理解させるために、辛酉の年から口述発表されたものが、ミロクの世の聖典であり、弥勒胎蔵経である神示の靈界物語である。

○二大根本義の精髓（大本教旨）

高熊山における宇宙主神の神教によって大本開祖の神訓を解明された精髓は大本教旨「神は万物普遍の靈にして人は天地経綸の主体なり」である。換言すれば経綸の二大根本義の結晶、大本教旨の神理と運用を説明されたのが、靈界物語八十余巻である。

○宇宙の真相

靈界物語には天（靈界）地（物質世界—宇宙）が、主神の理想（意志）にもとづいて、神権の発動である言靈の法則によって、靈・力・体の三元をたねとして幽の幽、幽の顕、顕の幽の順序に創造され、ついに吾人の住む物質世界（顕の顕）を創造し、地球をして五十六億七千万年の歳月を要して完成し、それぞれの世界の守り神を生み、これを守護せしめ

たもうた経緯を述べ、主神の理想世界である幽の顕の世界の様相と、地の神界（顕の幽）と地球の現界との相似相応する活動的経綸の主要がのべられている。

特筆すべきは宇宙創造の頭初より、神意実践の機関として人類を設計して、産出されし理由がのべられていることである。このことは大本神論、靈界物語が世界思想上における独壇場である所以である。ことにその人類が、主神の分身分体であって、神子神孫であり、神の生宮として、天上の神の理想世界を、地球上に樹立、具現、顕現せしむる神使であるというのである。「神人合一して茲に無限の神徳を発揮す」とある教旨は、実に宇宙真理の表現であるといえることができる。

○創造的経綸

大本の宇宙観は、主神が宇宙を創造されたそのままを基礎として、これを修理固成し、真化し、美化し、善化し、ついには愛善して、地球上の現実世界の、まのあたりに天上世界の理想を実現するというにある。実に理路整然たる教説である。理論的証明と事実的証明が完全に一致した主張である。

○経綸の主体の人類（人生根本義）

また、神の分派である人類が、神意のままに、地上に生まれて、幽の顕の世界そのままに移写して創造され、生成化育

され、修理固成される地球上において、万物を主神神慮のまに保護し、管理し、育成し、適材適所に使用して、地上に天国を実現するのが、人類の使命であることを述べ、地球上の各地に出生したる人類（人種・民族）は、おのおの天地経綸の神業を分担しつつ地上天国建設の神業に奉仕する天職使命がある由を明示され、その順序、方法、任務分担にいたるまで平易に面白おかしく述べられている。地上唯一の指導原理の聖典が靈界物語である。

○二大根本義の運用

靈界物語は治国安民の経綸の二大根本義、すなわち「宇宙の真相」「人生の本義」を明示し、神界の大経綸と、人の神業奉仕のありさままでのべられてある。

この二大根本義を理解し運用するときには、はじめて地上に真の宗教が生まれ、真の政治と真の教育がおこなわれ、真の産業が開かれ、真の経世済民が実現し、ここに主神の大抱負である天地合体、神人一致の聖代を招来するにいたるのである。

○真神の性質本体活用

宇宙の本体は真神（主神）である。真に宇宙と人生を解明するためには、真神の本体にふれ、これを理解し、真神の性

質。は言霊と形体によって千変万化する様相を知り、真神の活用が宇宙一切の創造と経営と生成化育の本源であることを理解してこれを実際化することにある。

この真神の本体、性質、活用を真神すなわち主神ご自体が説明されたのが、大本神諭および靈界物語である。

二大神典に示された神の意義、宇宙の組織、経綸、人生の根本義の研鑽と宣布こそ、大本教団におわされた大使命である。

さいわいにして、われら大本信徒は、神定の教祖と教主を仰ぎ、神定の教典をさずかり、二大聖地に属している。この時この際、大本教典の大精神（二大根本義）にめざめて、このミロクの世の実現のために、腹帯をしめ直して、最後の真理である宇宙大本神の神教を大宣布すべきときである。

○神教研鑽の急務

聖師さまは「仏教はホトケる道で、自国で亡んでも他国で栄えるが、神の道はカミしめる道で、自ら理解し実践して始めてノリ伝えることができる」と教えられた。第一にも第二にも研鑽が絶対必要である。

大本教理の具体化した「靈力体三元説」「大本教旨」の真意義を実践躬行すべき時は今日である。

（四十三年十一月十日記）

大本祭儀史考 Ⅱ 開教時代

「大本年表」 摘録

米 川 清 吉

「大本七十年史」が編纂刊行されるに当って、かつての大本事件のために散逸されていた貴重な資料が、全国信徒の絶大な協力によって収集され、年史の刊行後、それらの諸資料はいま資料編纂所にひきつがれて、年次計画のもとに、各項目毎の分類整理が進められている。

教団の成りたちにおいて、最も中心をなす重要な祭儀に関する諸資料もまた大本事件の不法な弾圧によって、あまりにも多くのものが失われてしまっているが、大本七十年史に記述せられている史実の資料にもとづいて、今後さらに詳細な本格的祭儀史の編纂が着手されなくてはならない。

「祭儀」の意味する重要性和広範な分野にわたる資料について、より深い研鑽が必要であるが、本稿は、大本開教時代における、大本の神々のご出現、また直接祭儀に関する事項について、「大本年表」からその一部を摘録し、研鑽の参考に

供するものである。

「大本七十年史」上巻、第二章、大本の発端の一節に、
「この神は三千世界を立替え立直す神じやぞ。三千世界一度に開く梅の花、艮の金神の世になりたぞよ。この神でなければ、世の立替えはできぬのじや、天理、金光、黒住、妙靈先走り、とどめに艮の金神が現われて、三千世界の太洗濯を致すのじや。これからなかなか大模なれど、三千世界を一つに丸めて万劫末代続く神国にいたすぞよ……」

大本では、一八九二（明治二五）年旧正月元旦の靈夢にひきつづいて始まった出口なおの帰神をもって、その開教とし、艮の金神のもとに、金勝要の神、竜宮の乙姫、綾部の熊野神社をはじめとして八百万の神々が綾部の本宮新宮坪の内に神集いして、ここに救世の神業がひらかれた…。

と述べられているが、大本開祖が五七才（教元年）の正月を

迎えられた旧正月元旦（新暦一月三〇日）の夜の霊夢のなか
でまみえられた尊貴な神々について、出口聖師著「大本の活
歴史の二」に

……さきの日夢裡幽境中拝観しまつりし大神は、畏くも天
照大御神、若日婁女神、大国主大神、玉依姫の神、須勢理
姫の神たちになりましたし、その場所は綾部の本宮の神境にて
ありしという。

と記されており、大本年表には

明治二十五年に十三日食物取上げて、十三日此方が此世の
事をあらまし申してやりたら、話なくなりたら天の様子は
どういふもので御座りますと申した折、天に天照大神宮殿
が、つむりは撫でつけてありたし、御手を合せなさりて、
西向きおなりなされて御出でなさる御前に篝火が燃上りて
あることを御見せなされたし（明治三十六年六月二十日御
筆先）とあります。水行は七十五日とありますから三月二
十六日迄続けられたものと考えられます。

と記されている。

なお大本開教当初、ご出現された神々については、本「大
本教学」誌に記載されている出口うちまる先生の「お筆先断
片考」を、また「大本七十年史」を十分参照されたい。

大本年表

明二五・旧三月 開祖神懸り鎮静し、行商に出ては附近の

家々の神床を掃除さる。

明二五・旧八月 神示に依り石のお宮の形出来る。「万年
青、松、葉蘭を植える」と記され「明治二十五年の十月
二十八日まで、石のお宮を建てよと申付けなされた石
の御宮が建つのは、明治二十五年に型が出口直と出口清
吉と四十七八の女の人が御出になって、じごくへにして
形がして見せてある。出口の元屋敷には世界の大本にな
る証拠に万年青が植えて見せてある。松の世になる証拠
には松が植えて見せてある。世界がばらける型には葉蘭
が植えさしてある。御手伝いなされたのが結構な御方で
ありました」（大二・二・一〇）「経歴の神論」

「……出口の屋敷に西向に良の金神の宮をたちのが見
せてあるぞよ。其宮は白木でちよとしたざつな宮が建
て、出口御直の住居を致すところが見せてあるぞよ。出口
の家の南に三尺のせいの三尺の横巾の地形さしてありた
が、出口の元屋敷は出口の手で守護がさしてあるぞよ。
出口の屋敷は結構な屋敷であるぞよ」（明二五・十二・
一・旧十・十三）

「何鹿郡綾部本宮坪の内の出口直の屋敷は神に因縁のあ
る屋敷であるから此屋敷に大地の金神様の御宮を建てる
ぞよ。大島の家売って下されよ。角藏殿退いて下されよ
金助殿家持って退いて下されよ。治良右衛門殿家持って

退いて下されよ。気の毒乍ら村中家持って退いて下されよ。此村は因縁のある村であるから、人民の住居の出来ぬ村であるぞよ」(明二七・正・三)など多くのお示しがある。

明二七・旧九月 亀岡の金光教会を訪ねしことより、綾部の金光教の支部を開くことになり、大島の別荘を借り奥村と同居さる。

明二七・一〇・一二、(旧九・一四) 毎月三日、十五日、二十三日を祭日と定める。

明二七・一〇・一三、(旧九・一五) 大島別荘に初めて国常立大神と金光大神を鎮祭する。

明二八・一(旧一) 四方平蔵初めて筆先を読む。

明二九・四・一七頃(旧三・五頃) 春季大祭の際、奥村の祭り方不備につき開祖、神懸りになられ御立腹、一時教会を離れられる。

明三〇・四・四、(旧三・三) 開祖、裏町梅原伊助の倉へ移られ、艮の金神を単独にて祭らる。

経歴の神諭に

「亀岡の大橋亀次郎目的立て出口をかつぶしに致して綾部に広間をこしらへて奥村をおこし金光殿の広間を拵らへて、出口は、だし売に致さうと思ふて大橋が奥村にいひ含め……」

「大島の裏座敷に集った者は四方平蔵氏初め十一人で、月十円余りの経常費分担を決議し、三日、十五日、二十三日を祭日と定めることになった」とあり、またこのことについて

「……出口が気狂になりて広めて四十人利益やりてありたからこの大島の座敷に始まりに祭りたのぞ。これも皆都合の事ざぞよ。人民では分るまいがな、皆艮の金神の仕組であるぞよ……」

「……長らく世話になりたが是からは艮の金神が一方でやるから金光殿はもう日本は大概行き渡りたから是から金神が表てへ出るぞよ——金光殿は日本丈の事であるから物が小さいぞよ。此艮の金神は三千世界の事であるから分るが遅いぞよ。——金神の広間へ手柄さしたいと思ふて居りたなれども、是非なく直、べつにおくぞよ」

また明治二十八年旧四月〇日の経歴の神諭には、御三体の大神、艮の金神、竜宮の乙姫殿のお宮の造営について示されている。

「是迄は長らくの間元の此の世こしらえた元の生神は此には御宮と言ふ事も、御一方の御やすみ処と言ふことがないのであるから早く世の立替を致して治まりなさとこをこしらへならんから御三体の大神様の御休みなさる御宮と言ふものを地の世界にこしらへて艮の金神の御

宮を恐れ多い事であれども初発に此方稚姫君命の身魂の鎮まるところをこしらへん事には他の神の御宮がおそくなるから初発に出口直に明治二十五年にかたちが見せてあるが白木な雑なお宮が立つぞよ。出口直の元屋敷に立てるぞよ。明治二十七年に西岡弥吉の広間の折出口竹蔵の屋敷に良の金神の御宮を建てるぞよと申して筆先に出口直に書かして三宝に乗して四方源之助に渡してあるぞよ。……続いて竜宮の乙姫殿の御宮がたつぞよ。人民の知らんことであるから早くから知らしてあるぞよ。此村の人家を取りて下されと申してあるぞよ。

世の立替であるから昔からない事が出来ると言ふ事が毎度知らしてあらうがな毛筋も違はん筆先であるぞよ、立直しの筆先を出して置くぞよ。竜宮の乙姫殿には、おゆまいをなさる御遊びなさる所をこしらいてあげますのぞよ。出口直に初発にかたちが見えてあるぞよ。此近くの屋敷の内に大分大きな堤もほこさならんぞよ。世が治まりて来たら、立直しの方の御用は結構な事ばかりであるぞよ。たいもうであるぞよ」

明三一、旧正月の「大本年表」に、「開祖は本年正月より是まで奉称されし神名のほか更に左の神名を加へて奉称される事になりました。

坤の金神（豊雲野命）

木の花咲翁姫命（弥仙山祭神）

彦火々出見命（「」）

豊受姫大神（伊勢外宮祭神）

稚姫岐美命（伊勢鳥の宮祭神）

大国主大神（出雲大社祭神）

是まで奉称された神名は

日の大神（高皇産靈神—伊邪那岐神）

天照皇大神宮（天之御中主大神—撞櫛向津姫命）

月の大神（神皇産靈神—伊邪那美神）

丑寅之金神（大国常立命）

禁闕要大神（澄世理姫命）

竜宮の乙姫（玉依比売命）

雨の神（天の水分神—国的水分神）

風の神（科戸彦神—科戸姫神）

岩の神（岩長姫神—岩戸別神）

荒の神（大雷男の神—別雷男の神）

地震の神（武雷の神—経津主神）

万の金神

大本塩釜大神

であります」

とあり、さらに明治三三年五月六日（旧四月八日）付で

開祖御奉称神名、本日より更に五神名加はる。

大島大神（丹後冠嶋）、小嶋大神（丹後沓嶋）、元伊勢
神宮（丹後加佐郡）、一宮神社（丹波福知山）、神島大
神（播州牛島）

とあるが、その後間もなく、冠島開き 明三三・七・四（旧
五・八）、沓島開き 明三三・八・二（旧七・八）、鞍馬参
り 明三三・一〇・一（旧八・八）、元伊勢御水の御用 明
三四・四・二六、（旧三・八）、元伊勢の御水を丹後、沓島
冠島の竜宮海へ注入、明三四・五・四（旧三・六）、出雲大
社参拝に出発 明三四・七・一、（旧五・一六）、神命にて
出雲のお土で二班に分れて宮屋敷取りをなす 明三四・七・
二三（旧六・八）、弥仙山岩戸開き 明三六・五・二四（旧
四・二八）、七社参拝 明三六・七・三一（旧六・八）、な
どの御神業が始められている。

因みに、明治四五年（一九一二）七月一日発行の「善言
美詞」には、「教祖様の称へられし祈願の詞」としてつぎの
ように示されている。

御三体の大神様。日の大神様。月の大神様。良の大神神……
…国常立の大神様。坤の大神神……豊雲野の大神様。
竜宮の乙姫様……日の出の神様。禁闕金の大神……大地の
金神様。

弥仙山の木の花咲耶姫命様。中の御宮の彦火々出見命様。
大本塩釜御夫婦大神様。雨の神様。風の神様。岩の神様。

荒の神様。地震の神様。八百万の金神様。

取分け神風の伊勢に鎮まります天照皇大神宮様。豊受大神
宮様。於加良洲大神宮様。を始め奉り、日本国中に鎮まり
ます、世に出て御座る神様御一同様。昔から世に落ちて御
守護遊ばし下さりました八百万の生き神様。総産土の大神
様の御前に、日々の広き厚き御守護を有難う御礼申上ま
す。

此度の三千世界の二度目の天之岩戸開きに付きましては、
千騎一騎の御働きを願ひます。天下泰平国土安穩、世界の
人民一日も早く改心致しまして、神国成就のために働いま
すやう、御守護を御願申上ます。

大本皇大神守り給へ幸へ玉へ・惟神靈幸倍坐世
開祖は胸のあたりで、しずかに手を合わせて礼拝をされて
いた。

現在、綾部のみろく殿に奉斎されている御神体は、昭和二
十三年三月五日に二代教主の御染筆によるものである。（御
神名は省略）

なお、両側の（向って右）は開祖、（向って左）のお宮に
聖師、二代教主の神霊が奉斎されている。

明三一・一〇・八（旧八・二三） 大先生（聖師）初めて
綾部へ来られて裏町の倉を訪問して開祖と御面会。
明三二・七・三（旧五・二六） 大先生再度参綾あり、爾

来引つづき大本の神務に従事せらる。

明三二・七・一〇（旧六・三） 裏町梅原伊助の倉狭くなり、本町播磨屋中村竹造宅に広間を移す。移転祭に註文の高張提灯の神紋九曜が十曜となり、これより神紋を十曜する。「抱き茗荷」は依然出口家の紋と定めらる。

明三二・七・一七（旧六・一〇） 二代御世継末子澄子刀自と定めらる。

「御世継は末子のお澄殿であるぞよ。因縁ありて上田喜三郎殿は大模な御用致さずぞよ。さる代りには御大将に致すぞよ。」

「是から出口直と上田喜三郎殿と二人を世の改めを致さずぞよ。直と上田と神が御用に立るぞよ。艮の金神、万の神、出口直、上田喜三郎にうつりて参るぞよ」

明三二・九・一五（旧八・一五） 東四辻の元金光教会に中村竹造宅より、艮の金神国武彦命を遷座、幽斎修行場とする。

明三二・一・一二頃（旧一〇・二〇頃） 戦死された出口清吉氏の年金一時金下賜され、これを以て大島景僕氏の家を購入する。

明三三・一・一、（旧一二・一） 大先生と二代様の神前結婚式あり。

明三三・一・一、（旧九・一〇） 四辻を修業場として

大島の二階を大広間とし初めて神代造りの新宮をつくり大神様を御遷座し奉斎す。

前記のように、明治三三年七月の冠島開きに始まる開祖の出修ありて明治三六年五月二四日（旧四・二八）には弥仙山岩戸開きの神事が行われ、ついで七月三十一日（旧六・八）には、開祖、聖師、二代、三代、信者一行―四魂揃ったこと、三代お世継のこと、神界経綸成就、弥仙山岩戸開きのお礼、産土神のお働きの願いのため綾部七社参拝あり。

「此大望な三千世界の世の立替は変性男子でないと出来ん事であるから、世を治めるのには木花咲耶姫殿の身魂、大本の変性男子の御世継は末子の澄子なり、女子が坤の金神、身魂は男子と女子とが夫婦なり、澄子の身魂と会長の身魂とは親子なり、肉体では会長と澄子が夫婦に致して、木花咲耶姫殿の分け身魂、此大本は代々女の御世継と相定めるぞよ。肉体が女子であるぞよ。取違のなき様に致さんと取違を致すと大間違が出来るから外の教会とは違うから、無調法は恐うてやう致さん様になるなれど万劫未代続かす大本であるから、出口直のうちに気を附けて置くぞよ。」

明三六・七・三一、（旧六・八） 七社参拝の日、開祖より燐寸及び肉食廃止のこと申渡さる。

明三六・一・二六（旧一〇・八） 艮の金神、御三体の

大神、竜宮の乙姫のお宮出来上り鎮祭——二階神殿の祭りかえをする。

明三七・四・二三 東四辻の広間に大國主大神を奉斎し各戸の祖靈改式奉斎。

明三七・五・二二（旧四・八） 聖師の肉体を瑞の御靈の宮居と定める。

明三八・四・三（旧二・一） 開祖、神示により水行のあがり。

明三八・五・一四（旧四・一〇） 開祖、世界平和、皇軍勝利のため沓島へこもらる。

明四〇・二・五（一二・二三） 節分、神様沓島より弥仙山へお上りとて参持。

明四〇・一・三（九・二八） 竜宮様の祭典（別荘）大本二階に二十八灯を点じ礼拝、礼拝後和知川に流す。

明四一・四・二三（三・二三） 艮の金神のみ鎮祭ありしも坤の金神を併せて鎮祭。

明四一・六・二三（五・二五） 大神様宮敷地の地鎮祭。

明四一・一・一・二三（一〇・三〇） 大本最初の祭式講習

明四二・一・一・二二（一〇・一〇） 弥仙山より神靈奉迎し神殿落成式及び遷宮式祭典——今後は十一月二十二日を以て記念祭を行ふ事に決定さる——八雲琴を初めて使用する。

明四四・一・二六（一二・二六） 大社教本宮教会、本院の設置となり、幽冥大神を奉斎し、各自祖靈をも鎮祭す。同四五年旧三月十五日祖靈社落成、役員信徒の祖靈も併せ鎮祭。

明四五・四・二四（旧三・八） 教祖、聖師、二代、三代教主、役員信者、伊勢内宮、外宮、加良須神社参拝、この参拝後、教祖水行を止めらる。

大本における祭典行事の基本は、明治三十年代から明治末年にかけて漸次整備されてきているが、その当時は、**祭典** 月次祭 陰歴の三日、一五日、二三日に執行。

大祭 毎年、節分と春、秋の三回、行われた。節分に生大豆を供え始めたのは明治三四年の節分からであり、当時はまだ人型行事は行われていない。

御神体 信者が御神体をまつようになったのは、明治二六年後半からと考えられる。綾部の黒谷のきずき大判の和紙に書かれた筆先を御神体として授けられ、開祖みずから雌松を供えて四方すみ宅で鎮祭されている。信者はこれを宮に納めたり、軸物として礼拝していた。

お宮 開祖の「天地そろうた飾りのないお宮をつくるように」との指示により作られた形が今に継承されている。明治三三年一月、大島の二階の神床に鎮祭されたお宮が始めてのものである。これを機に、本部ではお宮三体

役員の宅では二体、一般信徒宅は一体をまつることに定められた。

おひねり 明治三一年閏三月六日の筆先に「艮の金神は千里わきからでも出口直、艮の金神と頼みたなれば、改心次第でどんな事でも聞き済みあるぞよ。艮の金神をひろめて下さるのは、女松^{おなまつ}とおひねりでひろめて下されよ」とあり、きずきの和紙に「うしとらのこんじん」と書かれ、後には「ひつじさるのこんじん」とも書かれたものがさげられていた。

肌守 明治三十三年頃より、開祖の直筆のものがさげられた。

朝夕の礼拝 明治四五年発行の「善言美詞」によれば、朝拝には「天津祝詞」と「大本祝詞」を奏上し、夕拝には「天津祝詞」と「神言」を、「感謝祈願詞」は月次祭等に用いられた。

神名の奉唱は「大本皇大御神守り給へ幸へ給へ」「惟神靈幸倍坐世」をそれぞれ二回唱え、教祖の神霊にたいしては「惟神真道弥広大出口国直霊主命守り給へ幸へ給へ」を、その他の神々には、それぞれの神名が唱えられた。

守護神奉斎 大正初期頃から、守護神名が授けられ、これを正式に奉斎したのは大正七年六月からで、昭和十年の

大本事件が起きるまでつづけられた。

祖霊祭祀 明治三七年、同四四年の年表の記事に見られるように、三七年に始められている。出口家では、それに先だち、これまで養父豊助の供養を正暦寺（真言宗）でおこなっていたが、明治三四年一月、同寺の供養をことうり、神道に復祭した。明治三七年には、大広前に各家の祖霊を改式奉斎してこの頃から本格的に神道復祭が行われるようになった。

奥津城 明治三七年、開祖の兄清兵衛氏の帰幽に際し、現在天王平に設けたのが信者の奥津城の始めであり、大正七年には開祖の奥都城が築かれた。

聖師が明治三八年夏頃から宇治方面の布教の為綾部を離れられ明治三九年九月十日（旧七月二二日）皇典講究所に入學され、同四一年十一月帰綾せられる三年余の間は、せっかく出来た教会も警察の圧迫をうけ大本の教勢の最も困難を極めた時代であって、二代教主のご苦労は非常なものであった。その間においても細々ながら毎月次祭や大祭また霊地参拝も行われてきているが、当時の大本行事日記による大祭費用及び献立の記録によってその状況や役員の苦労がしのばれる。

○明治三十九年十一月十八日（旧十月三日）

秋季大祭 費用明細

十三銭 雑魚 五合

十二錢五厘 大根

四錢 昆布

七錢五厘 鰯

十三錢 醤油

六錢 大根

四十錢 糯米

十八錢五厘 酒

十錢 さらし 四尺

五錢 焼豆腐

六錢四厘 白豆腐

二錢 砂糖

一錢五厘 酢

七錢五厘 さば

計金壹円五十五錢四厘

(記録には右の如くあれど

計金壹円四十六錢九厘となる)

出口家の御馳走

一、大根白和へ

一、焼豆腐、大根、昆布、鰯

以上盛合せ

役員信者の御馳走

一、大根白和へ

一、芋、大根、昆布、盛り合せ

お下り

一、御鏡、林檎、みかん、御飯

右 費用負担 役員六人

四方平蔵、木下慶太郎、田中善吉、

四方与平、時田金太郎、塩見順

明治三十九年中総掛金

貳拾五円六錢

明治三十九年中総出金

貳拾四円貳拾錢

差引残金 六十五錢

(記録には右の如くあれど差引残金七十六錢となる)

「原文のまま」

○明治四十年正月の記録に

旧正月元日 御神饌 一台

旧正月三日 御神饌 一台

此日までに御鏡二十組、

お米三升御供へ

旧正月五日 御鏡開き

御神饌 お米、鏡餅、野菜

以上三台外に御供米二升、みかん二〇、御酒

正午お礼、午過ぎ直会

出口家 八人

参拝者 十人

役員親子 十八人

お下げ紙包、お餅二切れ、みかん、御飯 午後四時御礼

御筆先、五時半閉会

費用明細

十七銭 米 一升

八銭五厘 醬油 五合

十四銭五厘 雑魚 五合

十八銭 せんきり 四百匁

三銭 肴

十二銭五厘 みかん

五銭 揚豆腐

十九銭五厘 割木

二銭 塩

四銭五厘 紙

発日費用(老田四銭五厘)役員負担

四方平蔵、木下慶太郎、四方与平、田中善吉、時田金太

郎、塩見順、中村小松、竹原房太郎、以上八名

○明治四十一年節分祭執行(二月四日旧正月三日)

午後六時半夕食 礼拝は筆先拝読の後 節分祭に移る

御神饌

上段 甘酒一台 鏡餅四台 御灯明

中段 白豆一台 米二台 海魚一台 果物一台 青物一台

乾物一台 うどん一台

下段 柿一台 米一台 其他一台

午後十二時より甘酒を一同に下さる

お下げ如左

鏡餅二切 白豆一包 柿 みかん せんべい

その夜は弥仙山の遙拝あり

節分祭費用明細

三銭五厘 麩

一銭五厘 昆布

十三銭 鯛 二

十銭五厘 ウドン 七

五銭 せんべい

二銭五厘 ゆば

三銭 にんじん

一銭五厘 ひらな

十二銭五厘 みかん 五百匁

二十一銭 かわらけ 三十

二十一銭 ろうそく

二十五銭 おけさう(桶杓か)

計 一円十銭二厘

役員負担

役員 四方、木下、四方(与)、田中、時田、塩見、四

方(安)、野崎以上八人、十四銭宛

中村小松 七銭二厘の負担

他に甘酒一斗代(大本行事日記参照)

以上の例のほか弥仙山、冠島、沓島参拝や春季大祭、祖霊大祭等の行事日記の記録も残されているが、当時の参拝者は少ないながらも祭典は厳重に執行されており、役員の人たちはそれぞれ土方や賃仕事に従事しながら、その得たお金で開祖様の御神務またお筆先を書かれる紙、筆、また日々のお給仕の費用にいたるまで真心こもる御用に奉仕し、また毎月三回月次祭毎に十銭宛の月掛金を持ちより経常費に当てた。

明治四十一年、聖師が帰綏され、これまでの金明霊学会を改組し、大日本修齋会を創立せられた、一方当時の宗教統制策のもとでは、教団としての独立化は許されず、いちおう「大成教直轄直霊教会」として発足しなければならないところに聖師のなみなみならぬ苦心があった。しかしこの頃から教団としての本格的な形態が整い、直霊教会開教式の、式次第祭典、祝詞、また神饌物の記録によっても、よくそれをうかがい知ることができる。

それと共に神苑の拡張整備が積極的に進められ、神殿の造営(明42・11・22、旧10・10)、祖霊社(明45・5・1)、

西の石宮(大2・5・17)、金竜殿(大3・9・25)、沓島・冠島・六合大島・塩釜神社(大3・9・26、旧8・7)、金竜海第三期工事竣工(大5・3・19)、東の石宮(大6・4・28)、大八洲神社(大6・11・29)等が相次いで竣工し教祖殿、言霊閣、印刷所増築等全くめざましい発展の基礎が進められていった。(大本七十年史上巻参照)

また、「大日本修齋会会則」(明41・10・13改正)が制定され、その第三条に「本会齋殿ニハ会祖創設ノ由緒ニ依リ、宇宙万有ノ主宰ニ坐ス 天之御中主神、国之常立尊ヲ始メ天神地祇八百万神等ヲ奉齋ス」とし、例祭については当時の神道の行事に準ずる例祭のほか、節分祭、春季大祭、本会創立祭(四月五日)、秋季大祭、遷宮記念祭(十一月二日)、月次祭(三日・一日・二三日)等が制定され、開祖を会祖・総長とし、聖師は会長に就任された。また祖霊殿をもうけて会員の祖霊を祭祀することとした。

当時、「開祖は、大本が他の教団の下部教会となることに ついては、当局の干渉や圧迫を避けるためには、やむを得ないこととされていた。したがって、大成教の祭壇は大島の家の階下に設け、大本の祭壇はこれを階上に設けて、大本の神の祭壇が、直接官憲の目にふれないように配慮されていた。

明治四十一年一二月八日には、大成教直轄直霊教会の開教披露式が挙行され、あわせて大本秋季大祭が執行された。当日の

参拝者は「百名ばかり」（大本行事日記）と記されている。

前（明治四〇年）の秋季大祭には、出口家の家族をあわせてもなお、参拝者がわずかに二〇名に満たなかった実情とくらべれば、王仁三郎のはたらきが、いかに多く寄与したかを知ることが出来る——と「大本七〇年史」に述べられている。

その後、大正七年十一月六日（旧一〇月三日）開祖御昇天に至るまでの大正期の主なる祭事関係を列記すれば、

大元・一〇・一 教祖、福知山一宮神社へ役員信者と共に参拝。

大一・一二・二八 艮の金神を大國常立尊と奉称、教祖を大出口大神と奉称することとなる。

大二・三・一〇 大國常立尊、豊雲野尊御夫婦お揃ひになる。

大ニ・五・一四 教祖、福知山の金比羅神社へ参拝、お伴百余名。

大ニ・一一・二五 聖師生家上田家、大本皇大神鎮祭

大三・四・二〇 教祖人力車にて弥仙山参拝、お伴二百余名。

大三・六・一 聖師以下六一名冠沓島参拝。

大三・七・三 教祖に稚姫君命懸られ月の大神様へ一週間お詫びの御祈願せらる。

大三・七・一〇 お詫び満願の日として西の石宮にて祭典執

行。

大三・八・二三 日独国交断絶、教祖、聖師、寝食を忘れて世界平和祈願せらる。

大三・九・二一 聖師、三代教主外一九名、伊勢加良須神社へ参拝。

大四・五・一九 金竜海より天之御中主大神の御神体靈石現わる。二三日金竜殿に仮遷座（大正三年秋金竜海よりみろく様の御神体発見）

大五・四・四（旧三・三） 聖師、大和叡火山へ出発。

大五・四・一〇 福知山金毘羅神社、一宮神社参拝。

大五・四・一三 聖師の左眼下の頬病み出し遂に神島形の玉石現れ出る。

大五・六・八 聖師、三代教主沓島参拝。

大五・六・二三 聖師神島開きのため綾部出発、同六月二八日（旧五月二八日）神島の神霊をお伴して帰綾さる。

大五・八・六 聖師、三代教主一行四七名、沓島参拝、海上俄に荒れて途中にて遙拝帰綾、四ツ尾山上にて祝詞奏上帰館。

大五・九・七 聖師、神島参拝。

大五・九・一二 教祖、大八洲岩戸へ始めて参拝、種々の供物をなす。

大五・一〇・四（旧九・八） 教祖、聖師を始め出口家揃

つて（九名）役員、信者一行八一名神島参拝のため出発
大五・一〇・五 神島坤の金神鎮座祭挙行、尉と姥の神事を修せらる、七日帰綾。

大五・一〇・八 聖師三日間の無言の行、本日にて終り、大八洲岩戸にて口開きをせらる。

大五・一一・三（旧一〇・八） 教祖、良の金神、坤の金神、和合の御礼のため弥仙山参拝、聖師外百余名。

大正六・四・二四―二七、聖師一行吉野山へ。

大六・四・二八 大本を挙げて福知山の八幡神社、一宮神社参拝。

大六・五・二三 聖師、神島参拝のため出発お伴百余名、同二八日、肝川よりお土米を持ち帰らる。

大六・八・二五 聖師、神島参拝。

大七・二・五 聖師、八重垣神社参拝 お伴三百名、大神鎮祭式執行。

大七・三・二〇 聖師、山陰地方へ出発。
大七・四・一六 聖師、大和三山巡り。

大七・四・二七 鎮魂修業は大八洲神社にて行はることとなり、聖師自ら審神さる。

大七・五・二四 神島参拝のため聖師以下八十余名出発、翌日参拝。

大七・八・一 武蔵氷川神社、石清水神社、京都方面神社の各分霊奉迎のため役員出発。

大七・八・一八（旧七・一二） 聖師七十五日の修業始まる、十一月二日修業終る。

大七・一一・六（旧一〇・三） 午後十時教祖昇天、旧十月以降を神聖元年となす。

大七・一二・五 教祖本葬執行さる。

とあり、大本はいよいよ大正時代の発展期に入る。
以上は、大本開教草創時代における祭儀に係る事項を大本年表によって摘録したのですが、このほかにもまだ重要な事項また洩れおちも多いことをおわびいたします。他日の本格的祭儀史編纂を期する次第であります。

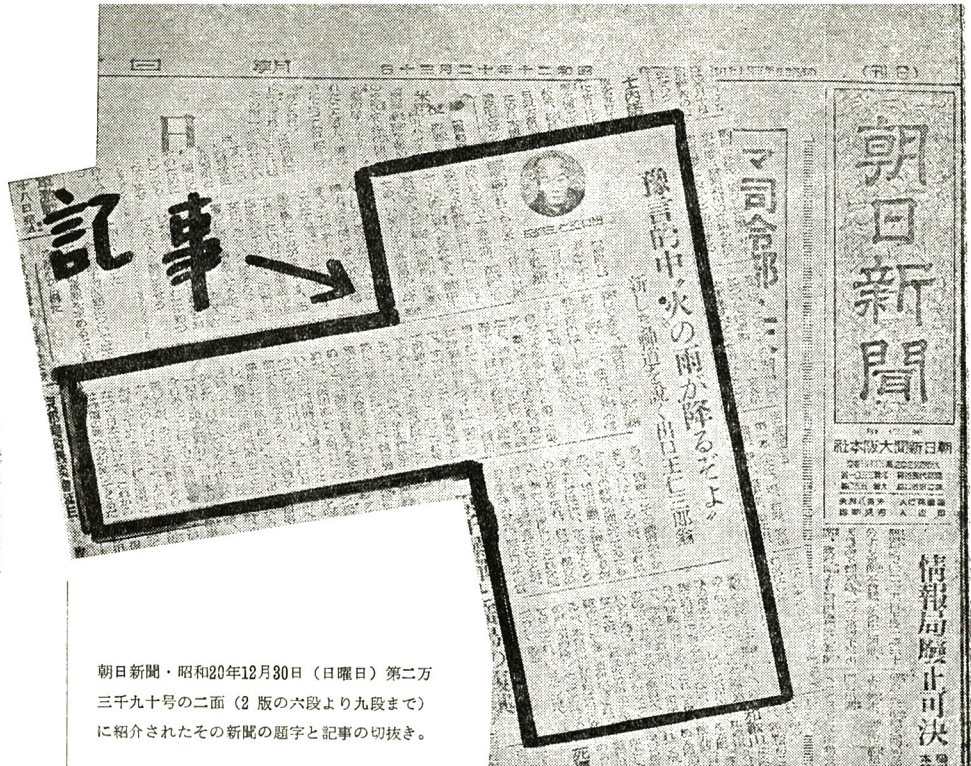
予言的中“火の雨が降るぞよ”

新しき神道を説く出口王仁三郎翁

「日本は世界平和の先駆者たらねばならぬ、世界の軍備撤廃による世界平和の実現のときが近づきつつある」との、確信にあふれた出口聖師の発言。これは、日本の敗戦直後吉岡温泉にて大阪朝日新聞記者の求めに応じて語られ、同紙に掲載されたものです。重要な記録として、ここにその記事の全文を記載いたします。（「大本七十年史」下巻七三四頁参照）

（鳥取発）去る十年十二月八日大本教弾圧の際検査されてから本年九月八日解放されるまで十箇年間、沈黙してゐた大本教祖出口王仁三郎氏は七十五才の衰へもみせず、獄中生活でかかった軽い神経痛の保養のため、いま鳥取市外吉岡温泉で静養してゐる。敗戦日本の冷厳な姿がどう映じたか、神道の変革や信教の自由は―獄中生活の思い出をまじへて語る同教祖の弁。

自分は支那事変前から第二次世界大戦の終るまで因はれの身となり、綾部の本部をはじめ全国四千にのぼった教会を全部叩きこわされてしまった。しかし信徒は教義を信じつつけて来たので、すでに大本教は再建せずして再建されてゐる。ただこれまでのやうな大きな教会はどこにも建てない考へだ。治安維持法違反は無罪となったが、執行猶予となった不敬罪は実につまらぬことで「御光は昔も今も変らぬが、大内山にかかる黒雲」といふ浜口内閣時代の暴政をうたったものを持出し、「これはお前



朝日新聞・昭和20年12月30日（日曜日）第二万
三千九十号の二面（2版の六段より九段まで）
に紹介されたその新聞の題字と記事の切抜き。

が天皇になるつもりで信者を煽動した不敬の歌だ”といひ出し、黒雲とは浜口内閣のことだといったが、どうしても通らなかった。自分はただ全宇宙の統一和平を願ふばかりだ。日本の今日あることはすでに幾回も予言したが、そのため弾圧をうけた。“火の雨が降るぞよ、火の雨が降るぞよ”のお告げも実際となって日本は敗けた。これからは神道の考へ方が変わってくるだらう。国教としての神道がやかましくいはれてゐるが、これは今までの解釈が間違つてゐたもので、民主主義でも神に变りがあるわけではない。ただほんたうの存在を忘れ、自分の都合のよい神社を偶像化してこれを国民に無理に崇拜させたことが、日本を誤らせた。殊に日本の官国幣社が神様でなく、唯の人間を祀つてゐることが間違ひの根本だった。しかし大和民族は絶対に亡びるものでない。日本敗戦の苦しみはこれからで、年毎に困難が加はり、寅年の昭和二十五年までは駄目だ。いま日本は軍備はすっかりなくなつたが、これは世界平和の先駆者として尊い使命が含まれてゐる。本当の世界平和は全世界の軍備が撤廃した時にはじめて実現され、いまその時代が近づきつつある。

教学の研鑽を望む

立花
大国以都雄

「もの言え、くちびる寒し秋の風」という一句は、私には身にしみて痛切な教訓である。

すでに大本に入信して五十年にもなるが大本教団では、自分の研究なり疑義にたいし、そつちよくに発言すると、ただちに反撃され、裁かれてしまう傾向が強い。そこで、ものいわぬ人間になりすます。そうすると彼はこのごろやや改心ができたらしいと批判される。これではもの言わぬに限るといふ明るさのない人生観ができあがる。ものもいわず、だまうてうつむいて、ただいわれるままに働いておれば、それが素直な身魂で、磨けた

改心のできた人と判定される。それが教団の姿であるというのなら、何も研究する必要もなく、何の考える必要もない。

思考も教学も、研究も調査も体験もない活力のない人間が、神の子神の宮としての理想像ということになれば、人間性は不用のものであり、思考し、比較するために自由を与えた神の造化の誤りであるのではあるまいか。

たがいに言い、たがいに研鑽し合つて精神的の門戸をたたき、啓発し合つてこそ、人間の発展と進歩がある。神の示した「素直」ということは、人間性を放棄し、与えた自由を閉せという意味ではな

いと思う。

どこの宗教でも、歴史を持つ宗教には教学部門というものはある。そしてそこで、いろいろ教義などが研鑽される。したがって、その研鑽の資料として、ものいう人のくちびるに秋の風が当たたらぬよう、おおらかな配慮がなされ、真剣な研鑽がくりかえされている。

よその宗教がそうであるから、大本もそのまねをせよというのではない。歴史がある宗教は、しぜんとそうなつてゆくのが当然であるというのである。何故なら、今年は開祖の昇天から五十年というこの五十年の間に世はうつり変わった。

世の風俗習慣、生活態度、社会の構造、国家のありかたなど、一変したのもあれば、しだいしだいに変わったものもある。文字のつかいかた、表現のしかたにも違ったものがある。したがって、現時点から過去をふりかえて見れば、すでに意味のない、わけのわからないものもあることになる。

たとえば、開祖さまが紙屑買いをされたといっても、紙屑を問題にしない現代では、それがどれほどの生活上の価値であったか、さっぱり理解されないことになる。だから、その当時の社会と人間の生活とを結びつけ、紙屑とその価値とを理解させるための「時代考」という研鑽が一応必要となってくる。昔は子守り奉公したという。その子守り奉公というのは、当時の社会では、徒弟制度の年季奉公であった。したがって、どの程度に人間として取扱われたか、「奉公」とはどのような意味かの説明がいる。

お筆先にある「立替え立直し」という

文字でも、私達が入信した当時は特定の言葉であって一般社会には用いられていなかった。そこで先輩にその意味を聞くと、この「立替え立直し」というのは大工用語で、建築のとき家を建て代えるとか、建て直すとかに用いるのだ。開祖の夫は大工の棟梁だったから、日常建代え建直すという言葉をつかわれていたの。その言葉が開祖の想念にあった。良の金神さまが、その想念をつかわれて宇宙の「立替え立直し」と論されたのだと説明された。その後、この言葉が大本によって流布されたためか社会でも使用するようになった。またある学者の信者は、立替え立直しは、「改造」ということだと説明してくれたものもある。この改造という言葉は、第一次世界大戦によって欧州の思想が日本に輸入されたとき訳語として改造の文字が当てられたのであって果たして良の金神さまの論された「立替え立直し」の意義と、「改造」という意味が一致するものかどうか研究の余地が

あるのではないかと思う。だが改造だの解放だのという文字が汎濫する時代だったから、大本でも、大本は精神的改造をする神の誠団であると宣伝して、何の疑義もなかった。しかし改造は国家の構造政治経済の仕組を改めるというのである。その改めるというのはどういように改めるかという人間主体の共同社会の意味である。ところが良の金神さまの立替え立直しは、元の昔に返すという意味が強く、神が主体で、神意による神政社会ということになる。しかもこの立替え立直しの中には、未完成時代の宇宙と創造の結果の邪気との関係から、主宰神の引退、神契神約の実現という創造歴史が内意している言葉である。だから思想的な「改造」という言葉とはことなり、その内容に立体的な深度があるので、同一のごとく解釈するのは大きな誤りになるのではないかと憂う。

こういうように、文字の上からも教学的に研鑽しなくては、そのままのみに

して後世に到ると、とんでもない解釈となる憂いもある。ゆえに研究、調査、研鑽が時代時代におこなわれなくては、せっかくの金言玉辞もついに古色をおびて時代に通じなくなるのである。

私が入信したころは「立替え立直し」の解釈とともに大きな問題となっていたのは、日本および日本国家の主権が立替え立直しの中にふくまれるかどうかという問題であった。立替え立直しは、他の世界各国およびその主権は立替え立直しの対照となるが、日本国および日本の主権は立替え立直しの対照ではないという論議と、当然対照となるという論議で青年たちは二派にわかれ、幹部も互いに論じあっていた。この問題は今日ではすでに世界大戦によって、ある程度まで考えがまとまったのであるからよいようなものの、大本事件という大きな謎がからんでいるから、軽々しく見すごすことは後に大きな過恨を残すことになると思う。

「天が地となり、地が天となる」の論

しについても、何を意味するのであろうか。現在われわれ国民は民主日本国の主権者である。大戦以前、こんなことを言葉に出して言おうものなら、たちまち首の座に直らなくてはならなかった。今日では天と地と主権の位置が大きく変わった。筆先はその意味を予言されたのであろうか、それとも別の解釈があるのであろうか。「天が地となり、地が天となる」というのは、神の経綸のことであって、国常立尊が出現されたので、天の神がお手伝に地に降られた。そのことを天が地となり地が天となると言われたのだと説明されたものもある。いずれにせよ一通りも二通りも解釈があると、拝読する人は迷い、そこからいろいろの説が出るようになる。

私どもがもっとも筆先を理解する上に苦しんだのは、明治二十五年から大正五年九月までの筆先と、大正五年九月八日神島参拝後の筆先における素盞鳴尊、小松林命などの神格的位置と神業のありか

たであった。大正五年九月までの筆先には世を持ち荒した神として素盞鳴尊、小松林命が明確に指摘されていた。ところが神島参拝後は手のひらをかえずごとくみろくの神霊であったと、これまたまことに明確に神示されている。これはどうしたことであろうか。小松林や素盞鳴尊がうつっている出口王仁三郎の肉体の行動は、岩戸をしめる役であって、悪神である。悪の御用の鏡であるし、悪のやりかたの型をさせてであると筆先では、トントンたたかれている。筆先で書かれているのみではない、したがって王仁三郎の行動は悪のやりかただからといって一切が悪意に解され当時の幹部役員、信者にいたるまで、その行動を邪魔し、行動を封鎖することが善とされ、神業の一つとしてとりあげられていた。このことは出口聖師の回顧の記事にもあきらかにされている。

当時の役員信者が出口聖師をいためつけ、邪魔し、悪の張本人とののしって、

日常の生活行動までも閉じこめてしまったことは、いまでも語り草になって伝えられている。この場合、出口聖師を陰から、かばいたすけたのは二代教主であり一二の信者であった。だからその当時の教団をあげて、素戔鳴尊と小松林命は悪神であり、その肉の宮である出口聖師の行動は許すべからざるもの、岩戸をしめる悪行の代表者であるとされた。開祖もまた別にそういう幹部信者の考えが間違いであるともいっておられない。いな、むしろ聖師の行動に対し、役員を使われて邪魔させられたような命令を出されている場合すらある。そこで役員は本気になり、づにのって出口聖師を暗殺しようとまで企てた事実がある。実におそろしいことで、それほど深刻なエピソードが内在している。それなのに、神島参拝を一期として、全く天が地となり地が天となったような、悪が善の神であり、待望していたみろくの神の神霊であったというのである。幹部、信者の驚きは想像

できる。アフィンとして口があかない仕組であつたかしらないが、これはまたあまりにも深刻であつた。悪の型の岩戸を閉める素戔鳴尊の行動を封鎖することが神業であり、その神業奉仕に誠をささげる役員の一生懸命の行動が、手のひらが返るように大まちがいであつたことになった。当時の役員が私にこっそり語つたことは、「御用だご用だといつて、引き出され、岩戸をしめる張本人を徹底的に動きのとれぬようにするため身魂を傾けたそれは純真な信仰から出た誠の気持ちであつた。それが間違いで、みろくの神を邪魔したことになる。泣くに泣けないいいよのない、むしろ口惜しい気持ちがある。私たちは馬鹿だったのだらうかそれとも筆先の解釈がちがつていたのだらうか。信仰もこういうことになる又何が何だか、今まで何をしたか、さつぱり考えられない」とホロリと涙を出した。今の今まで、神の仕組はだれにもいわぬとあるが、これも一つの仕組であつた

のだらうか。

この大きな間違いについて、出口聖師は靈界物語第七巻の総説に

「教祖が明治二十五年より、大正五年旧九月八日まで筆先を書かれたのは、全部御修業時代の産物であり、矛盾のあることは教祖自筆の同年九月九日のお筆先を見れば判然します。

変性女子のやり方について今日まで誤解していたという意味を書いてをられる。……私はもはや止むに止まらない場合に立到つたので露骨に事実を告白しておきます。要するに教祖は、明治二十五年より大正五年まで前後二十五年間、未見真実の境遇にありて神務に奉仕し、神政成就の基本的神業の先驅をつとめられたのである。女子は入道は明治三十一年であるが、未見真実の神業は、同三十三年まで全二箇年間でそのごは見真実の神業である。靈的に言うならば、教祖よりも十八年魁けて見真実の境域にすすんでいるのは、お

「筆先の直筆を熟読するれば判ります」

とある。未見真実と見真実の関係であると解説されているが、聖師の入道は明治三十一年二月九日で、それから三十一年十月（旧八月）綾部を訪れられて開祖と

対面され、三十二年七月に金明会を創立三十二年一月、二代教主と結婚、七月に冠島開き、八月に杵島開き、十月に鞍馬山参りがおこなわれている。そうすると明治三十三年まで未見真実であったということは冠島、杵島等における神霊との対面されるまでが未見真実であって、それより見真実ということは、その神霊と直接交霊見接されて確かめられたので、それからは見真実となられたという意味に解せられる。開祖が未見真実であったというのは、神島参拝まではみろくの神の神霊と直接霊見されなかったので、未見真実であったということであると理解される。

しかしそれはそれとして、いやしくも神さまともあろうものが、何故、そこま

で行って接霊しなくては真実が判らないのであろうか。「まことのことは、いまのいままで言わぬぞよ」という筆先はあるが、それが仕組というものであるゆえんであるのであろうか。

神さまと神さまの間の問題ならば、それでよいだろうが、筆先となり、信者がそれによって信仰的な態度を決定してゆくとすると、それは神界、霊界のことではなくて現界のこととなり、「神業奉仕」というかたちで、行動的となつてあらわれる。そしてそれが大本の歴史の中の暗黒点となり、神業を妨害した役員信者があったということが後世までも伝えられて、その役員信者の子孫は、妨害したものの子孫だと、いつまでも指さされる運命におかれる。私はそれらの子孫の人々から悲しい運命をなげく言葉を幾度か聞かされた。

大本には因縁によって、岩戸をしめる役と岩戸を開く役があると聞かされている。以上の未見真実、見真実の問題に関

しては、岩戸をしめる役と開く役との身魂の因縁で、それはどうすることもできないといわれるのだろうか。大本は人羣物類を救う救世の神業が根本的なものであって、身魂の因縁はどうあれ、結局はすべてが救われなくてはならないのではないか。それなのに今なお、子孫の人々は現実に差別の眼をもって見られ、何か打ち解けられないちぐはぐな心境で暮らしているということは、救世の神業からいえばまことに遺憾なことというべきではあるまいか。

神業は、演劇である。役者は善の役もあれば悪の役もなくは劇にはならぬという意味のことがある。岩戸をしめる役も開く役も役者であって、それによって大本の神の仕組が成就することになったのだ、まことにご苦労の役であったということになれば、子孫の人たちも笑つて得心することができるとはあるまいかそれならそれで、もっと演劇観の信仰理念が深められなくてはならない。

こういうことについて、大本の教学はもっと掘り上げて、決定的でなくてもよいが、ほぼ後世のものが理解することのできる研鑽発表があつてよいのではないか。

いつまでもあやふやに「心ごころにとりて下されよ」という筆先の言葉を借用して、いかにもらしく誤間化し、冷淡であつては、後世に到つて、研鑽が深めら

れていったとき、当時の教学は何をしていたかと、その怠慢さを責められることになりはしないか。

こういう意味において、私は今日は今日なりに、誠意をもって教学の研鑽にいそしみ、その責めを果たすという熱意が必要だと思う。

こんなことを書くと、また批判、非難されることになる。しかし誰かが言わね

ば、ついにそのままに葬られて、教学の研鑽はおこなわれなくなる。

「もの言え、くちびる寒し秋の風」この一句が教団からはなくなつて、誰もが、おおらかに協力し、研鑽し、教義の真諦がより解明されて、多くの人々が「真信の光」に浴することができようよ。私は祈るものである。

大本教義からみた健康道 (1)

三 浦 一 郎

はじめに

現代は社会不安と同時に健康不安時代である。四〇才以上の人で、体に故障がないという人は少ない。たとえ病氣と称すべきほどのことはなくても、肩がこる、腰が痛い、体がだるい、手がしびれる、すぐ疲れる、食慾がないなどと訴える人は少なくない。また、ガンノイローゼや心臓ノイローゼも多く、あるジャーナリストは「近代人でノイローゼでない人は正常でない」などというほど、世は挙げて心身異常時代である。

今日、世界的傾向として恐れられているのはガン患者の急増である。わが国でも厚生省の統計によると一九六五年（昭和四〇）一月から十二月までの原因別死亡率は三十代の女性ではガンが第一位、二十代前半ですでに第三位、後半では第

二位に上昇している。男性の一昨年（一九六七年）の統計では十五才から二十九才までの死亡率第一位は事故死、第二位は自殺、第三位はガンとなっている。

アメリカやイギリスにおいても少年死亡率の第一位はガンだといわれているが、わが国においても年々にガン発生の年令が低下し、昨年春（一九六八年）ごろ東京で「乳幼児をガンから守る会」が発足したほどである。

日本の三大死因として第一位は脳卒中、第二位はガン、第三位は心臓といわれているが、ガンに限らず、これまで成人病といわれていた高血圧症や糖尿病、腎臓、胃かいよう等は今では年令層に関係なく、早くも高校生時代から老化現象があらわれているという。

これらの原因はいったどこにあるのだろう。東京教育大学の杉靖三郎教授や東京国立ガンセンターの重野哲郎博士や、

東京の日赤血液センターの森下啓一博士らをはじめ多くの人たちは、その原因を食物に帰している。すなわちタール系色素や人工甘味料、防腐剤、漂白剤、つや出し等の添加剤に問題があるとしている。その他日本人の主食である精白米、肉食過剰等もあげられている。

以上のほか日本人の健康を侵蝕するものとして農薬、排気ガス、騒音、大気・海川の汚染等公害問題が大きくクローズアップされている。とり立てていうならば飲食物のなかには一つとして安心して食べられるものはなく、水から空気のはてまで気づかわれる時代である。神論に「よくもまあ、ここまで、世を汚したものだ」と、神さまがお嘆きになったことを、今さらのごとく思い出し、慄然たらざるをえない。

一、病気の原因は霊界、現界面から

大本の教義の上からいうならば、この世界は、霊界と現界（物質界）との結合から成立し、人間もまた霊と体との結合から出来上っているものだという。そして霊は霊界に属し、体は物質界に属して物質の法則に支配されているものだという。そして天地は霊主体従の法則によって造られているという。

この原則の上に立っているというならば、病気の原因もまた霊的（または霊界的）にくるものと、体的（現界的）にくるもの

と、両面あることが考えられる。したがって、これが対策（治療方法）も当然両面あるべきだと思う。すなわち霊的（精神的）にきた病気に対しては霊的な治療方法（御手代お取次、奉斎、復祭、霊祭、被禊、解除）を施さねばならないし、体的（不摂生、不衛生、過労等）にきたものには、体的な治療方法（医薬、物療等）が必要である。

しかるに、ともすると宗教者は、世のあらゆる病気・災難等はみな霊的にのみくるものとして、霊的対策（加持、祈禱呪術、祈願）をもってすべてを解決しようと努力し、科学者はまたすべての病気や不幸・災難はみな体的（現界的）にのみくるものとして、体的対策（医薬、物療、その他現界的努力）だけで一切を解決しようとするが、これはいずれも一面の真理にだけ執着するもので一種の迷信だといわなければならない。なぜならば、前記大本教義の基本原則からいって二面対策の必要なことは論をまたないからである。出口聖師のお歌に

◎病悩いんづきの身みを天地あめつちにいのるとも夢現世ゆめうつしよの医師をわすれな

とあって、天地の神々に祈るだけでなく、病気によっては医者にもかかり、薬品も服用すべきであることを教えている。

また

◎靈幸たまきはふ神かみに壯健まわやか祈るとも暑さ寒さの防ぎわすれな

とあって、朝晩にいくら神さまに一家の健康を祈願しても、

それだけではいけない、同時に各自みずからもまた体的に充分気をつけて、暑さ寒さを防ぐ用意を怠ってはならないと警告している。

まとめていうならば、病氣の原因は靈的な要因（後述する）によって起こるものと、現界的な不生、不注意等によって起こるものと両面があり、その対策（治療方法）もまた心靈療法（精神療法）と藥物療法（医薬、物療等）の二つがあり、いずれも必要であることが説かれている。しかし靈主体従の天地の法則に従がって靈的対策（治療法）に重点がおかれている。

二、治療対策も精神、肉体両面から

出口聖師は「三鏡」の中で「病氣と病体」と題して

「病氣の大半は忘るるときに全治する。元来、心からおこるものだ。病体となれば大半は医術の必要がある。しかし十中の八、九は病氣なのだ」

といわれている。病氣と病体とはちがう、というのが聖師の持論のようである。おおかたは文字通りに氣を病んでいるのだという、病体ならば医者や薬品でなおせるが、病氣とあれば、これは氣を病んでいるわけであるから、医者や薬では治らないというのである。しからばどうすればよいか、それには心の持ち方、考え方を教えてあげねばならない。すなわち

心を治せば病氣も治るというのである。そこに精神療法の存在意義があるといえよう。

白隠禪師（一六八五—一七六八）語録に「三合の病に、八石五斗の物思ひ」ということがあるが、これは病はたった三合しかないのに、あとの八石五斗は余計な氣を病み、神経をやんで、自分で自分を苦しめているのだと喝破しているのである。

また釈迦 Sakya. B. C. 480 は当時の名医であった耆婆 Jivaka: Jiva に「汝往つて身の病を治せよ、我れ後に往いて心の病を治せん」（耆婆経）といっているように、仏教の任務としていどころも身病（体的）の治術よりも、心病（靈的）の治療が主であったことが明らかである。さいきん大日方大乘著「仏教医学の研究」や、服部敏良著「釈迦の医学」等が出版され、心病を癒やすための八万四千の法門もさることながら、地・水・火・風の四大不調より来る肉体の四〇四病を癒やすための藥物療法についても釈迦は当時の進歩したインド医学を縦横に活用されたことを紹介している。

三、病氣や社会不安も心の悩みの反映

出口聖師は「三鏡」の中に「病氣は心の悩みの反映」と題して、次ぎのようにのべておられる（引例が少し長くなるがこれまでの記事の内容を裏づけるために必要なものゆえ諒承

願いたい)

“この現象世界のことを「うつし世」という。それは、実世界を写映した世界、という意味なのである。しからば実世界とは何か、という問題がおのずからおきてくるが、わかりやすい言葉でいうと、実世界とは「精神界」ということである。

たとえば人が激昂して相手をなぐるとすると、激昂するところが精神界の働らきであって、なぐることが現象界の働らきになるのである。大宇宙間に起こる諸々の現象は実に複雑きわまる関係におかれているものであるから、簡単な人間の推理力で、その奥底を把握することは不可能であるが、すべて精神界に起きたことは、あるいはその形を変えその過程を変えることはあっても、必ず現象界にとごとく写映されるものである。

この世の中に病気がますます増加するのは、すべて人の心の悩みの反影であり、犯罪がいよいよ多くなるのは、人の心の偽わりがかく現われてくるものなのである”
とあり、またお歌に

“大三災、小三災の頻発も人の心の反映なりけり”
と示されている。風・水・火(すなわち大地震や噴火、大暴風雨、海嘯等)の大三災や、飢・病・戦の三災すらも、すべて人の心の反映であって、天災でなく人災であると警告して

おられる。

むかしの為政者(聖人、君主)は国内に天変、地変があったり内乱があったり悪疫が流行したりすると、身の不徳をせめて、罪を一身に帰し、潔斎して天地神明に謝したものである。わが国でも記、紀の崇神天皇の段を一読するならば誰れでも聖王の治績のなんたるかを知ることができるであろう。

かつて出口聖師が森良仁氏に向って“国乱れて医道みだれ医道乱れて国乱れる”と語ったといわれるが(御井敬三氏談)、中国最古の医経である「素問」に、黄帝(B・C三〇〇〇)が岐伯(B・C三〇〇〇)に向って“政治の要道は何か”ときかれたときに、岐伯は“民をして病むなからしむるに在り”と答えている。また唐医学(六〇〇―九〇〇)における「医道は治国の本である」という当時の思想がわが国に輸入されて、文武天皇大宝二年(七〇二)に施行された大宝律令やその後の養老律令(七一八)等にも現われて医療官営が規定され、また医学教育も国費ですべてまかなっている。この制度は平安末期(一一九二年ごろ)までつづいたのである
古来“医は仁術なり”として尊敬されたのであるが、今は国政が乱れるとともに医道もみだれ、“医は算術なり”と輕侮されるようになった。

前記の“病気がますます増加するのは、すべて人の心の悩みの反映”であり、“犯罪がいよいよ多くなるのも、人の心

の偽わりがかく現われてくる”といい、また“大三災、小三災の頻発も人の心の反映”だということになると、結局病氣も犯罪も天変地変も、出てくる根源は一つだということである。そうなると、すべては「人の心」の問題にかかってくる。社会病んで人病む、という言葉があるが、ここでは逆に、人病んで社会病み、さらにそれが天地に波及して天変地変を引き起こすという論理である。いずれにしても“己れより発したものは己れに還える”という悪循環をくりかえしていることが首肯される。人心不安が社会不安を呼び、社会不安が人心不安をよんで、人々をノイローゼにおとし入れ、いろいろな病氣の原因をなしていることも考えられる。青少年の事故死自殺の多いことをみても社会不安、人心不安の如何に深刻であるかが察せられる。各地に起こる学生騒動、基地問題、沖縄問題、ヒッピー族やフーテン族のぼっこ、深夜バー、深夜映画館の開業、金嬉老事件や一〇八号事件、三億円強奪事件交通事故やたくさんの公害問題等々、社会不安の累積である。国際的にもベトナム問題、ソ連のチェコ侵入、劉少奇首席の追放、キング牧師やケネディーの暗殺、フランやポンドやマルクの不安定がアメリカのドルへ響き、ひいては日本の経済界を動揺させている。また絶えず原子戦争による人類総滅の戦いの不安が世界中をおうて人心を暗くしている。

こうした社会環境、国際環境が人々に精神的不安感をもた

らし、生きる自信を失わしめ、デカタンのしているのではなからうか。このままで進むならば、たとえ第三次世界戦争（原子戦争）が起こらなくても、不道德、犯罪、不摂生、不衛生、公害、病氣等のために人類世界は早晩滅亡しないとも限らない。

哲人プラトーン (Platon. B. C. 427-B. C. 347) は“たゞ医者と弁護士の栄ゆる社会は腐敗した社会である”とまさに現下の日本に適評というべきである。今日のような犯罪だらけ病人だらけの社会では高邁な民族理想の実現などは思いもよらず、国民はただただ国内の犯罪や病氣と闘うのが精いっぱいということになってしまふであらう。

四、信仰と病氣

出口聖師は「玉鏡」の中に

“人間はどんなものでも、精神の作用をうけないものはないたとえば、恥ずかしい思いをすると顔が赤くなるし、驚ろくと蒼白になり、怒ると黒くなり、またそれが烈しくなると青黒くなるものである。それは精神作用を現わしたもので、精神作用によって血液の循環が旺んにもなる、また病氣のごときも精神作用によって左右されるものである。したがって信仰があれば病氣はなおるものである。絶対無限の力を有し、愛にまします神さまが助けて下さると信ずれ

ば病氣はなおる。……すべて氣の持ちようである。たとえば梅干のことを考えただけでも酔っぱい氣持ちになる。失望落胆すれば身体がえらいし、希望が出れば勢いが強くなる。

病氣のごときもキリストの言ったごとく「汝の信仰、汝を癒せり」というごとく、その人の信仰の力によって病氣が癒るのであって、癒る人の力が大部分で、神の愛と和合して全快するのである。常日ごろ信用する人に触ってもらえば病氣もなおるが、信用していない人にお願ひしてもらっても病氣は癒りにくいようなものである。信仰の強い人は王仁の書いた短冊や雜誌などで、なでただけでも癒る。まったく信仰の力である。

このべている。病氣は心の悩みの反映であり、心から起るものだとするならば、当然、心の持ち方や精神作用によってすなわち信仰の力によって病氣を癒すことができるはずである。昔から「病は氣から」という諺（ことわざ）があるごとく、また「病氣」とは「氣を病む」と書くように、氣の持ちかたが大切である。

素問（B.C 200）にも「怒れば氣上る。喜べば氣緩む。悲めば氣消ゆ。恐るれば氣めぐらず。寒ければ氣閉ず。暑ければ氣泄る。驚けば氣乱る。勞すれば氣減る。思へば氣結ば」とあり、また貝原益軒（一六三〇—一七一四）の養生訓

に「百病は氣より生ず。病とは氣やむ也。故に養生の道は氣を調うるにあり。調うるは氣を和らげ、平かにする也」と説いている。

近代の傑僧、原坦山（一八一九—一八九二）は「惑病同原論」のなかで「諸病の本原は惑也。諸惑の本体は無明也。無明は即和合業識の念想也。是故仏氏一念の起動を千惑万病の本原とす」といい、また同書に「煩惱は疾病の原因にして疾病は煩惱の結果なり」と喝破している。大内青巖居士（一八四五—一九一八）これはについて「坦山老師は惑と病とが同源であるというので、病は吾々の体に異状を生ずるもので惑というのは吾々の心に異状を生ずるのである。この心の異状を生ずる惑と、身体に異状を生ずる病とは全く別物ではない。心の病すなわち煩惱を解脱して悟りを開けば、体の病も無くなるというのが坦山老師の發見である」（坦山和尚全集）とのべている。前記無明とは「迷い」のことであるが、無知と解してもよい。人間の罪惡や疾病の原因は無知無明から起こるとするのである。

益軒の養生訓に

「ある人の曰く「養生の道、飲食、色慾をつつしむの類、われ皆知れり。然れどもつつしみがたく、ほしいままになりやすき故、養生なりがたし」という。我おもうに、これいまだ養生の術をよく知らざるなり。よく知れば、などか養生の道

を行わざるべき。水に入ればおぼれて死ぬ。火に入ればやけて死ぬ。砒霜ひそうをくらえば毒にあてられて死ぬる事をば、たれもよく知れる故、水火に入り、砒霜をくらいて死ぬる人なし多慾おほほのよく生をやぶること、刀を以て自害するに同じき理（ことわり）を知れらば、などか慾を忍ばざるべき。すべてその理を明らかにしらざる事は、まよいやすく、あやまりやすし。人のあやまりて、わざわいとなることは、皆不知よりおこる。赤子の腹ばいて井におちて死ぬるが如し。灸をして身の病を去ることを知れる故。身に火をつけ、熱く、痛めるをこらえて、多きをもいとわず、これ灸のわが身に益あることをよく知れる故なり。不仁にして人をそこない苦しむれば、天のせめ、人のとがめありて、必らずわが身のわざわいとなることは、その理明らかなれども、愚者は知らず。あやうき事を行ない、わざわいを求むるは不知よりおこる。盗人はただ宝をむさぼりて、身のとがにおち入ることを知らざるが如し。養生の術をよく知れらば、などか慾にしたがいてつつしまずやはあるべき”

と、まったく事理明かである。〃やればよいことが分つておつても実行できない”というのは、結局まだ分つていないからである。真によいことが分つたならば自殺にひとしい不養生をやめて、いさぎよく養生の道に精進すべきはずである。それができないというのは未だ真に分つていないからである

とのべているのであって、結局疾病も犯罪も人の無知無明からおこるものと断じているのである。

出口聖師が〃信仰の力によって病氣が癒るのであって、癒る人の力が大部分”だとのべておられるが、ここが非常に大事な点である。「癒る人の力」とはなんだろう。それは病者自身の内部生命力（自然良能作用）をいっているのであって人間は本来生理的に自分の病氣は自分で治すだけの働らきを内部にもっているのである。氣をやんだり心配するとその働らきが鈍化する。信仰によって迷いの氣持ちを払って明るい氣持ちになると、本来の働らきが復活し旺盛になるから病氣が治るという意味だと思ふ。

結局、信仰なく正しい人生觀、世界觀を持たない精神的放浪者がふえたことが、社会不安、健康不安の根本だといえうである。これを真に救う道は決して医者や薬ではなく、一つの哲学、宗教を与えて正しい人生觀、世界觀を持たせることであろう。これを与えることこそ真の救いというべきである。もしそれを得るならば、たとえその人は肉体的には明日に仆れようとも、靈的には生きてる人である。正しい世界觀を持たずに騒ぎまわっている精神放浪者は、たとえ百、千、万才まで生き延びたとしても、それは生きながら死んでる人だといえるであろう。その点、真の信仰者は強いものだといえるであろう。

現代医学に足らないことは哲学と宗教がないことである。

東洋医学には陰陽、五行、五氣説等の哲学がある。治療を通じて人生観、宇宙観までも指導できるようになっている。またこれによって心の持ち方を変えなければ、ほんとうの養生法がのみにくめない。ほんとうの養生法が分らないと、せっかく治療しても、同じ原因をくり返せばまた病気になるであろう。それではほんとうに治したといえない、再び不摂生して病気になるように指導しなければならぬ。それには体の病気を治すだけでなく、精神的建て直しが前提とされるのである。

「玉鏡」の「信仰と病氣」の章中に「信仰があれば病氣はなおる」「すべて氣の持ちようである」「その人の信仰の力によって病氣がなおる」「なでただけでも癒る」「精神力によって微菌も殺すことができる」「肺病は癒らないことはない、信仰に徹底せないからである」「薬にたよるような精神では癒りにくい」等々と、信仰に徹しさえすれば難病克服も至難でないことを強調されている点に注目しなければならぬ。

〔病神・悪霊の所為〕

大本神諭天の巻に「病神が、そこら一面に覇をきかして、人民をのこらず苦しめようとたくみて、人民のすきまを、

ねらいつめておりても、神にすがりて助かることも知らず
に、外国から渡りて来た悪神の教えた、毒には成っても、
薬には成らぬヤクザものに、たくさんのお金を出して、長命
のできる身体を、ワヤに為られておりても、夢にも悟らん
馬鹿な人民ばかりで……」（明治三十一年旧五月五日）。

「神にすがりて助かる」という徹底した信仰を忘れて、医者と薬にだけ頼っている現実に対する警告であらう。

また明治三十二年旧七月一日の神諭に

「大本の経緯は、病氣なおしではないぞよ。神からいただいた身魂を、悪の靈魂に汚されてしまうと、肉体まで病の容器になりて、もとの大神に、たいへんな不孝をかけておる人民が、病神につかれておるのであるから、もとの水晶魂にねじ直して、ちつとでも靈魂が光り出したら、病神はこわがりて逃げてしまふぞよ」

と示されている。以上の神諭によると、病氣の原因はたんに精神的なものだけでなく、病神、悪霊の所為であることもある、と指摘している。出口聖師は「三鏡」の「伝染病根治法」の章において、

「伝染病は、すべて悪霊のなす作用であるから、それを根絶しようと思えば、年に一度ぐらゐ餓鬼に供養してやるとよい。団子をつくり、河縁において、ていねいに慰霊祭をすれば、決して悪病は蔓延せぬものである」

とあり、さらに同書の「流行性感冒」の章に、

「本年（昭和九年）もだいたい流行性感冒が、はやるようであるが、戦争と流行性感冒はつきものである。あれは霊の仕業である。近年満洲事変、上海事変等で多くの戦死者を出したが、それに対して、禊ぎの行事が行なわれていない。禊ぎの行事の大切なことは、霊界物語にくわしく示しておいたが、昔はこの行事が厳格に行なわれたから、戦争などでたくさん死者があっても、地上は時々清められて、流行性感冒のごとき惨害から免がれることを得たのであるが、今の人たちは霊界のことが一切分らず、禊ぎの行事などあることすら知らぬ人たちのみなるがゆえに、邪気充滿して地上は曇りにくもり、濁りににがり、ただれにただれて、眼を開けて見ておられぬ惨状を呈しているのである。気の毒にも、こうした事情を知らぬ世間の人々は、医師や薬にのみ重きをおいて焦心焦慮しているのであるが、霊より来る病気を体的にのみ解せんとするは愚かである。禊ぎの行事の偉大なる効果を知る人は、凶事あるごとに常にこれを行なうべきである。さすれば一家は常に朗かで、めったに病氣などにはかからぬものである」

とあって、霊的にきたものには霊的な対策、ここでは禊ぎの行事の必要なことを教えている。古来、祓除、潔斎、大被行事等が行われたゆえんである。その他祈禱、禁厭、呪術等の

シャーマン (Shaman) 医師が各民族間に古代に行われたのもあながち迷信とのみ呼ぶことはできない。

紀に「夫の大巳貴命、少彦名命と力を戮せ心をつに、天下を経営る、また顕見蒼生及び畜産の爲めに、則ち其の病を療むる方を定む。又鳥、獸、昆虫の災異を攘はむ爲めには、則ち其の禁厭之法を定む。是を以て百姓今日に至るまで威恩頼を蒙れり」

とあり、古語拾遺はさらにこれを裏書きして「皆有二効驗一也」と附記している。また伊邪那岐命の筑紫の日向の橘の小門の檍原における禊祓をはじめとして、岩戸前における諸神の祈禱および須佐之男命の罪科解除の諸形式は、みなわが国上代における祈禱禁厭の濫觴である。さらに火災を防ぎ、疫癘を遏めんがために鎮火、鎮花の両祭を創め、悪鬼、蠱穢を攘除せんために道饗祭、大被祭等を行ない、また饒速日命は外祖高皇産靈神より十種神宝を受けて地上に天降り鎮魂祭の基を開いた（但し古語拾遺には「凡、鎮魂之儀者、天鈿女命之遺跡」と伝えている）等、みなわが国シャーマン (Shaman) 医師の淵源をなすものである。

ギリシア、エジプト、インド、中国等の上代にも幾多の呪禁家、巫医等が存在して治病の宗家をなしていた時代があるすなわち身体医学や精神医学とは別個の立場に立って、病氣の原因を、神または悪魔、悪霊のなす業として、これに対す

る被除、祈禱等が行われたのである。そういう心霊医術的な専門医家を普通の医者と区別するために古代中国では巫醫、巫祝、祝由という言葉で呼んでいた。文字の上からも巫医を表現するには古来「醫」の字を用いている。大本独特の「御手代」による病氣お取次ぎや、世界救世教の「お浄霊」、天理教の「おさしづ」、日蓮宗や真言密教の加持祈禱や神道の禁厭祈禱等は古代における「巫医」（シャーマニズム Shamanism）に属するもので、昔は専門の「醫家」として身分をみとめられていたものである。今はその職階が社会的にみとめられていないために、巫医は医師法違反（非医者として）に問われたりする不便が生じたのである。

〔醫と醫こころ〕

「醫」と「醫」の使い分けは、醫は靈的（精神療法、心霊治療一般）療法による治療、醫は藥物療法による治療というのである。大字典にいう「醫は悪しき病、一説病人の声を示す昔は酒を藥とせり、故に殷と酉を合せて其義を示す。又醫と書くは、巫が療治を司りし故なり」と。またいう「巫とは鬼神を祭り舞樂などして神降しを行う女（男を覲という）」とある。すなわち「醫」とは「巫醫」の義であること明瞭である。

昔は朝鮮でも中国でも日本でも藥物を用いずに「抜い」

「祈り」「祭り」等によって治療目的を達する巫醫がたくさん存在した。後世藥物療法によるものと、神の力によるものとなす巫祝の治療と二つに分れたのであろう。そこで「醫」と「醫」の使い分けによって両者を区別したものと思われる康輿字典の巫字に山海經を引いて曰く「開明東有_二巫彭、巫抵、巫陽、巫凡、巫相_一。（註）皆神醫也」とあり、これによれば彭氏、抵氏、陽氏、凡氏、相氏等の巫醫はみな世にも勝れた神醫であるという意で、「醫」とは神醫の義であると解しても間違いいではない。中国の歴史によれば巫賢は殷の賢者であって巫醫として著名であり、巫咸は鴻術をもって堯帝の侍醫として有名である。次ぎに「巫醫」の二字を運用する文獻として

◎論語子路篇曰「人而無_レ恒。不_レ可_二以作_二巫醫_一」

◎管子權修篇曰「好用_二巫醫_一」

◎說苑脩文篇曰「以_二巫醫_一匍匐救_レ之」

◎呂賢尽數篇曰「巫醫毒藥逐除治_レ之」

◎醫賸云「巫醫唯是醫_レ已」

◎汲冢周書云「鄉立_二巫醫_一。具_二百藥_一以備_二疾災_一」

◎素問移精變氣論云「上古之醫必為_二祝由_一則所以有_二巫醫_一之

稱_二也_一」（祝由とは巫のこと）

◎肥後の人、村井琴山著、医道二千年眼目篇云「周より以前は巫醫の術兼ね行ふに似たり。周の代に至って文明極まる

故に、巫と醫との職を分ちて二術とす。巫に司巫あり掌_二群巫之政令_一。醫に醫師あり掌_二五醫之政令_一。これより巫醫竝称すと雖も二職となる云々」。

◎史記に倉公のいう六不治中に「信_レ巫不_レ信_レ醫六不治也」といい、尙古書に「巫醫百工之人々賤_レ之。君子与_レ之不_レ齒」といって巫醫を賤しめた時代もあった。しかし古人孫子邈（唐時代の代表的医家「？一六八二」）を評して曰く「名士不_レ得_レ志多_レ隱_二醫卜之間_一」といい、賈誼曰く「古至人、不_レ居_二朝廷_一。必_レ隱_二醫卜之間_一」と、また後漢の許楊を評して「及_二王莽篡_二位_一。變_二姓名_一為_二巫醫_一」とあるをもってみれば、中国の聖賢が志を得ずに好んで巫醫となったものが少くないようである。（以上、三浦一郎著「かむながら医学」第二巻抄録）

平田篤胤の「静の岩室」に「醫」字について詳細に論じている。また江戸初期の名医、永田徳本の「醫弁」、和田東郭著「蕉窓雑話」、「独醉医談」、鶴之逸著「醫断」、桜寧室主人著「養生訣」、竹岡友仙著「医事集談」等に「醫」の字を使用している。

五、現代医学との接点

現代医学は肉体患部の対症療法にのみ終始していたが、近年オーストリアの精神病理学者フロイド Sigmund Freud.

1856-1936 の「精神分析学」や、ソ連の生理学者パブロフ Ivan petrovich pavlov 1849-1936 の「条件反射」、カナダのハンス・セリエ Hans Selye 博士の「ストレス学説」、また北米ハーバート大学の生理学者キャノン Walter. B. Cannon 1871-1945 やオランダの心理学者ランゲ、スイスのヘス Hess 博士 (1911-) 等の「間脳情緒中枢説」等が発表されるに至り、精神の肉体におよぼす影響が顕著であることが科学的に確認されたので、俄然精神面が重視され、病者の精神内容である宗教や信仰心が重要課題としてとりあげられてきたのである。

また、フロイドの門人ユング Carl Gustav Yung は医師として臨牀的に患者に宗教が有益である事実を科学的に立証したことや、また一八七〇年アメリカのハーバート大学心理学教授ウィリアム・ジェームス William James 1842-1910 の猫を使つての実験から、動物は悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しい、嬉しいから笑うのではなく、笑うから嬉しくなる、という発表など、大本神論に「喜べば喜びごとがでてくる、悲しめば悲しみごとがでてくる、勇めば勇みごとがでてくる」ということの科学的証言で、次第に宗教と医学との接点が見出されてきたように感ぜられる。さいきん九州大学医学部の心療内科における精神身体医学の成果などもその一例である。

靈界物語「資料篇」刊行について

教学研鑽所

奇しくも聖師さまが『靈界物語』のご口述を開始されてから四十八周年・丁未の年である昭和四十二年の瑞生大祭を期して、その校定本が発行され始めましたことは、実に意義ふかいことであります。

教学研鑽所では、今回の校定本刊行に際しまして、地上天国・ミロクの神代のプログラムであり設計書である、この『靈界物語』研鑽の手引きとして「資料篇」（とその総索引）を刊行すべく準備をすすめております。内容は、大別して次のとおりであります。

第一篇

- 第一部 靈界物語全巻の総目次
 - 第二部 靈界物語全巻の梗概
 - 第三部 靈界物語の神名事典
 - 第四部 靈界物語の用語辞典（地名・外来語を含む）
- 第二篇（項目別手引）
- 第一部 教理

第二部 神の経綸史

第三部 地上天国（みろくの世）

まず、第一篇では冒頭に物語の○総目次をかかげ、ついで各巻（全八十二巻）の○梗概、靈界物語の中で活躍される○神名の事典、また拝読に便するために、物語中の○用語（外来語・地名を含む）辞典をまとめさせていただきます。ただく予定であります。

第二篇にては、第一部は○大本の教理、第二部は○大本神の大経綸についてまとめつつあります。

第三部では地上天国、弥勒の神代の絶対条件として○大本の出現。○救世主。○立替え立直し。○指導原理。○聖団大本。○日本。○世界についてまとめつつあります。

ご参考までに、その「靈界物語の手引（項目別）」の目次（次頁）を本誌上にて発表掲載させていただく次第であります。

靈界物語の手引（資料篇） 目次

（案）

第一部 教 理

一 天啓の教典

（一）啓示の神書

- ① 啓示の様態
- ② 啓示と神がかり
- ③ 出口聖師の帰神
- ④ 高熊山

（二）啓示と新しい教会

- ① 聖言と聖地
- ② 聖言と信仰
- ③ 聖言と宣布

（三）神書・靈界物語

- ① 靈界物語の成立
- ② 大本神諭の真解書
- ③ 発表の目的

二 神

（一）靈力体

- ① 一靈四魂三元八力

（二）神格

- ① 愛善・信真

（三）大神人

- ① 大神人体

（四）言靈—神

① ② ③ の神声

- ② 神名と位置・神格・神業

（五）嚴靈・瑞靈

- ① 太元神

② 救世神

（六）主神

- ① 三位一体なる神

② 伊都能壳神

（七）天使

- ① 真神と天使

② 天人

- ③ 惡魔・邪神

（八）神の種別

- ① 幽の幽神

② 幽の顯神

③ 顯の幽神

④ 顯の顯神

（九）天津神・國津神

- ① 天津神

② 國津神

（十）みろく神

- ① 天のみろく

② 地のみろく

③ 王みろく

④ 人のみろく

三 宇宙の創造

（一）神の所造としての宇宙

- ① 創造の神

② 修理固成の神

③ 言靈と創造

④ 氫氮化醇

⑤ 四層の世界

⑥ 日地月星の發生

⑦ 地球の修理固成

⑧ 八百万の神の出現

⑨ 人類の創造

(二) 創造の段階

① タカアマハラ

② 安息日

③ 五十六億七千万年

(三) 宇宙の組織

① 三千世界

② 靈主体従

③ アキツノトナメ

四 靈 界

(一) 靈界の組織

① 天の神界と地の神界

② 靈界の境域

(二) 靈界の構成

① 靈的事物

② 意志想念の世界

③ 靈界の熱と光

(三) 靈国 (月の国)

① 靈国の統治神

② 構成住人

③ 統治

④ 靈国天人の任務と活動

⑤ 媒介天人

⑥ 靈国の位置と使命

(四) 天国 (日の国)

① 天国の統治神

② 構成住人

③ 統治

④ 天国天人の任務と活動

⑤ 天国の位置と使命

⑥ 名位寿富

⑦ 無垢・平和

⑧ 夫婦

⑨ 靈子

⑩ 職業

⑪ 休暇・趣味・娯楽

⑫ 祭典と説教

⑬ 団体間の交流

⑭ 天人の言語・文字

⑮ 学習と子弟教育

⑯ 生産と所有

⑰ 勤勞

⑱ 流通・配給

⑲ 衣服

⑳ 住居・調度

㉑ 庭園

㉒ 食物

㉓ 歡喜・悅樂

㉔ 智慧・証覚

㉕ 和合の情態

㉖ 昼夜・氣候

㉗ 方角・風景

㉘ 祖靈祭祀と天人

㉙ 現界人の信仰と天人の団体

㉚ 交通・通信

㉛ 通貨

㉜ 動・植・礦物

㉝ 文化・芸能

㉞ 天人の価値観

㉟ 天人の力

㊱ 天人の表現・表象

㊲ 天人の最も嫌うもの

(五) 中有界 (精靈界)

① 中有界の統治神

② 構成住人

③ 統治

④ 中有界の状態

⑤ 住人の情態

⑥ 死有

⑦ 中有

⑧ 生有

⑨ 外分の情態

⑩ 内分の情態

⑪ 準備の情態

⑫ 善惡の審判

⑬ 三途川と一途川

⑭ 精靈の教育

⑮ 再生

⑯ 生活情態

⑰ 兇兇界

⑱ 現界への影響

(六) 地獄界 (幽界)

① 根の国

② 底の国

③ 地獄界の統治神

④ 構成住人

⑤ 統治

⑥ 苦惱・贖罪

⑦救済

⑧情態・光景

⑨魔王・サタン

⑩地獄心

⑪悪徳と虚偽

⑫天界と地獄

五 宇宙の法則

(神的順序)

(一)一神・多神・汎神

①一神即多神

②万物普遍の霊

(二)霊主体従

①霊主体従

②体主霊従

③力主体霊

④霊体一致

(三)相応の理

①顕幽一致

②神書と相応の知識

③目的(用)の国土

④真釣りとは相応

⑤黄金時代―泥土時代

⑥相応の表現例

四 大神人

①全分と個体

②天国は巨人である

③大神人と聖地

④大・中・小日本

⑤大宇宙と大神人

(五)周期律

①時節

②天運循環

(六)因縁

①身魂の因縁

②国魂の因縁

(七)輪廻転生

①再生と転生

②屍化の法

③進化の法則

(八)道德律

①惟神の徳性

②治者と被治者

③親子

④夫婦

⑤男性と女性

⑥兄弟姉妹

⑦朋友

⑧師弟

⑨世界・国家・民族・人種

(九)自由意志

①人間の自由

②平等と差別

(十)永遠の生命

①人間の本体

②靈魂の不滅

③無限向上

出楔

①禊祓

②修祓

③抜戸四柱

(出)産靈の大道

①生成化育

②和合

(出)万教同根

①各宗教の使命

②根・幹・枝

六 人

(一)大本教旨

①人の意義

②主神と宇宙の縮図

③天地経綸の主体

④神人合一と霊体一致

⑤無限の権力と神徳

(二)人の使命

①神意実行の機関

②神の子神の宮(神格内流の終局点)

③天人の養成所

(三)精靈

①精霊と肉体

②霊と精霊

③ 精霊と自我

四 守護神

① 本守護神

② 正守護神

③ 副守護神

五 人と動植物

① 共通点、相違点

② 共存・共栄・大和合

六 一霊四魂

① 人の靈魂

② 四魂の活用

③ 四魂と人格

④ 神の分霊

⑤ 愛善と真信

七 内分と外分

① 神的知識と世間的知識

② 智慧と知識

③ 人格と内分外分

④ 内分外分と自由

八 意志と智性

① 意志

② 理性・智性

③ 人を形成するもの

④ 所主の愛

⑤ 真理と虚偽

⑥ 愛と仁（隣人愛）

九 信仰

① 真の信仰

② 信仰の必要性

十 改神と慢神

① 生れ赤子と改心

② 神的順序と事務的順序

③ 真理の三階級

十一 苦行と告白

① 天則違反

② 神の冒瀆

③ 誕生・再生

④ 出生の種類

十二 幽死の意義

① 靈肉脱離

② 靈的死者

③ 復活

七 神がかり

（一）神人感合の神法

① 神感法

② 他感決

③ 自感法

（二）鎮魂帰神

① 教理

② 大本歴史

③ その他

第二部 神の経綸史

一 初発の神政

（一）日・月・地・神

① 主宰神の決定

② 地球の創造神

（二）帰神（直接内流）

① 大本開祖

② 出口聖師

③ その他

（三）神懸（間接内流）

① 大本開祖

② 出口聖師

③ 教主

④ その他

（四）神憑（外流）

① 大本歴史

② その他

③ 地球の主宰神

④ 邪神の発生

（五）人類の発生と墮落

① 人類創造

② アダル彦・エバ姫

③ 人類滅亡

(三) 神人の出現

- ① 大神人
- ② 神人

二 国祖の神政

(一) 神の統治

- ① 神都 (地の高天原)
- ② 天地の律法と施政方針
- ③ 宰相神の任命
- ④ 天使の任命
- ⑤ 神柱の聖地への召集

(二) 世界経綸

- ① 国魂の由来
 - ② 十二の国魂の配置
 - ③ 八王・八頭の任命
 - (三) 世界の統治の概要
 - ① 十二の国魂
 - ② その他の重要経綸地
- 四 宰相神の更迭

① 宰相神の失政

- ② 天使長大八洲彦命
- ③ 天使長高照姫命
- ④ 天使長沢田彦命
- ⑤ 天使長広宗彦命
- ⑥ 天使長桃上彦命
- ⑦ 天使長常世彦命
- ⑧ 天使長二世常世彦命

(四) 神政の経緯

- ① ローマの戦いと世界の分立
- ② 和光同塵の神策
- ③ 世界平和会議 (常世会議)
- ④ 隠神の活動
- ⑤ 盤古大神系の登用

(六) 国祖の隠退

- ① 律法の破壊
- ② 国祖神系の減少
- ③ 遠慮神策

三 盤古の神政

(一) 盤古の擁立

① 盤古大神の経歴

② 擁立の理由

(二) 施政方針

- ① 体主靈從
- ② 和光同塵の神政 (祭政分離)

(三) 世界勢力の二分

- ① 八王・八頭の動静
- ② 大自在天系の対抗
- ③ 乱麻の世界現出

四 救世神の出現

- ① 野立彦・野立姫 (天教山・地教山)
- ② 宣伝神使と世界宣教

(五) 大洪水

- ① 大峠 (情況)
- ② 天橋と神示の方舟
- ③ 神の審きと救い
- ④ 贖罪

四 天津神の神政

(一) 天の大神の御降臨

- ① 地球の修理固成
- ② 国生み

(二) 諸冊二尊の神業

- ① 神生み
- ② 国魂の任命

(三) 伊弉冊尊の神政

- ① 神都 (ヒマラヤ山)
- ② 施政方針 (三五教)
- ③ 日出神による国魂任命 (南半球へ)
- ④ 黄泉神に対する経綸

四 三五教

- ① 五大教の發生
- ② 三大教の發生
- ③ 三五教
- (五) 大中教とウラル教
- ① 大中教の發生
- ② ウラル教の發生

(六)黄泉比良坂戦

- ①常世国の情勢
- ②神軍と邪軍
- ③戦闘の経過
- ④一つ炬の活動

(七)楔枝の神業

- ①立替えの神業
- ②立直しの神業
- ③三貴子

五 素尊の神政

(一)世界経綸

- ①神都(ヒマラヤ山)及び経綸地(コーカス山)
- ②三五教と霊体一致
- ③世界宣伝(宣伝使の派遣と三女神)
- ④食料政策
- ⑤武備政策
- (二)バラモン教の発生

- ①バラモン教
- ②バラモン教の教義

(三)誓約

- ①三女神と誓約
- ②被免(素尊)
- ③天教山における誓約
- ④八十猛神の叛乱

四天の岩戸

- ①岩戸隠れ
- ②岩戸開き

六 素尊の救世経綸

(一)千座置戸と神追ひ

- ①千座置戸(贖罪)
- ②神追ひ
- ③地教山の垂示
- (二)斎苑館の神業
- ①斎苑館の造営
- ②救世神業の策源地
- ③教主

④神柱の招集と養成と派遣

(三)日本経綸

- ①日本における経綸地(秋山館)
- ②素尊と綾の聖地
- ③八乙女の活動
- ④玉照彦・玉照姫
- 四錦の宮

- ①大教主言依別命
- ②日本宣伝
- ③海外宣伝
- ④嚴・瑞再現の経綸
- (五)言霊戦

①斎苑館の神庭会議

- ②ハルナの都への宣伝使隊
- ③大黒主とバラモン教
- ④常暗彦とウラル教
- ⑤アフガニスタン言霊隊
- ⑥インド言霊隊
- ⑦エルサレム言霊隊

七 天祥地瑞

(一)神と言霊

①言霊

②●の神声

③紫微天界の創造

(二)五層の天界

①創造神

②靈的宇宙の創造

(三)蔽の神

①水火の活動

②西の大宮(筑紫ガ岳)

③被いの道

四瑞の神

①東の大宮の造営(高地秀の峰)

②御槌代神

③神生み国生み

(五)神生みの旅

①高照山

②三笠山

③玉泉郷

④真鶴国

(六) 朝香比女の活動

- ① 真火の出現
- ② 栄城山
- ③ 狭野の食国
- ④ 万里の島 (田族島)
- ⑤ 葦原新国

第三部 地上天国

— みろくの世 —

大本四大綱領
大本四大主義
實現の世

一 大本の出現

(一) 世の終り

- ① 末世観
- ② 大本の終末観
- (二) 国祖の再現

⑥ 歡ぎの島

⑦ 葦原の国 (二名の島)

(七) 伊佐子の島

- ① イドムの国
- ② サールの国

① 三千世界の改造

② 大本開祖の帰神

③ 世の終り世の始 (良)

④ 聖言の發表

⑤ 地の高天原 (陸の竜宮館)

(三) 素尊の再現

① 坤の金神

② 出口聖師の帰神

③ 巖端二神の提携

④ 聖言の發表

⑤ みろくの大神の出現

⑥ 靈国 (天恩郷) の創設

四 金勝要神

① 二代教主の帰神

② 和合の神

(五) 新しい教会

① 地上天国のヒナ型

② 天界の移写

(六) 救世経綸の開始

① 冠島杳島開き

② 元伊勢 (水) 神業

③ 出雲 (火) 神業

④ 弥仙山開き

⑤ 神島開き

⑥ 蒙古入り

⑦ ローマ字・エス語採用

⑧ 世界宗教連盟と人類愛善会

(七) みろくの下生

① 昭和三年三月三日

② 月宮殿の建設 (国魂石)

③ 日本全国の巡教と霊場の決定

④ 朝鮮・中国への巡教

⑤ 芸術運動の展開

(五) 神柱の育成

① 地方神柱の任命

② 神柱の聖地召集

③ 青少年の育成

九 神教宣布

① 宣伝使制

② 御手代の神器制定

③ 神紋の制定

④ 靈界物語の發行

⑤ 大道場の常設

⑥ 人類愛善新聞の一部売り

二 救世主

(一) ヨハネとキリスト

① 水の洗礼 (大本神諭)

② 火の洗礼 (靈界物語)

③ 神息統合 (神靈世界の統一)

(二) 預言と警告

① 神靈世界に対するもの

② 人類に対するもの

(三) みろく胎藏經

- ① 地上天国建設の経緯書
- ② 最後の審判書

(四) みろく三身

- ① 法身みろく
- ② 応身みろく
- ③ 報身みろく

(五) 出現の時期

- ① 先哲の予言
- ② 神示の時節

(六) 出現の場所

- ① 再誕の地
- ② 再臨の地

(七) 神の血統

- ① 国祖と開祖
- ② 瑞霊と聖師

(八) 神業の継承

- ① 道統の継承（永遠、火継）
- ② 御神体・御手代

③ 神示の伝達

(九) 世界神柱会議

- ① 神庭会議
- ② 世界宗教者会議
- ③ 世界神柱会議

(十) 資格

- ① 九大資格
- ② 三十四相・八十八種好
- ③ 主師親の三徳

三 立替、立直

(一) 意義

- ① 国常立尊の世へ
- ② 神意実現の世へ
- ③ 体主霊従から霊主体従へ
- ④ 一切の改造
- ⑤ 身魂の改造
- ⑥ 大転換期・大完成時代

(二) 方法

- ① 神権・神徳によるもの

② 神教宣布によるもの

③ 大三災・小三災によるもの

④ 旧体制・旧秩序の変革

⑤ ミロクの世界のヒナ型の提示

⑥ 一輪の秘密と仕組

(三) 当事者

① 主神・国祖及び天使

② 神意を奉戴する人々

四 範圍

① 神霊世界

② 大本

③ 日本

④ 世界

⑤ 人事百般

⑥ 動物界

⑦ その他日月星辰一切

五 目的

① 皇道経済体制の断行

② 世界大家族制の実施

③ 祭政一致・世界大和合の実現

④ 神霊世界と現界の完成

(六) 時機

(七) 理由

四 指導原理

(一) 大神人主義

① 大神人体

② 理法礼道（四大身）

③ 神徳為本

④ 愛善主義（伊都能完）

(二) 霊体一致

霊力体三元説

① 精神と物質

② 霊五と体五

③ 霊主体従的運営

④ 神人一致

⑤ 相応の理

(三) 神定の職業

① 天職と職業

② 目的と用

四 神示の人生目的

- ① 神の子・神の宮
- ② 天人の養成所
- ③ 神意実行の機関
- ④ 天地の経綸者

⑤ 神示の国家

- ① 国魂
 - ② 人種・民族・国家
 - ③ 経済的自立
 - ④ 国家の天職・使命
- ⑥ 経綸書・靈界物語

- ① 宇宙の宝典
- ② 指導原理の原典

五 聖団大本

① 二大聖地

- ① 主神の御住所（エルサレム）
- ② 地上の靈国（亀岡・天恩郷）
- ③ 地上の天国（綾部・梅松苑）
- ④ 神界経綸の中府

② 二大教祖

- ① 神人の大本
- ② 大本開祖
- ③ 出口聖師

③ 二大教典

- ① 大本神諭
- ② 靈界物語

④ 道統

- ① 神定の教主
- ② 神定の教主補

⑤ 世界の鏡

- ① 神界の鏡
- ② 世界の鏡

⑥ 世界の型

- ① みろくの世のヒナ型
- ② 世界事象の型

⑦ 神業奉仕者

- ① 因縁の身魂
- ② 修業者

⑧ 経綸の実行

- ① 神教宣布
- ② 神教護持
- ③ 予言・警告
- ④ 天界の具現

⑨ 目的・使命

- ① 世界大家族制度の実現
- ② 人類愛善世界の実現

⑩ 将来の大本

- ① 世界の神都（大本）
- ② 人類の魂の故郷
- ③ 宗教の大根源
- ④ 世界宗教

六 日本

① 世界の縮図

- ① 蜻蛉のトナメ
- ② 頭脳国日本
- ③ 国祖と日本

② 世界の神床

- ① 玉垣の内津御国

- ② 磯輪垣の秀妻国

③ 三種の神器

- ① 五百津御統麻留珠
- ② 八咫鏡
- ③ 草薙劍（日本國土）

④ 大本・日本・世界

- ① 三段の型
- ② 高天原

⑤ 日本國の天職

- ① 道義的世界統一
- ② 神示の大和魂
- ③ みろくの世は先ず日本から
- ④ 和光同塵の神策と發光

⑥ 靈国日本

- ① 神慮發現の国
- ② 靈主体徒国

七 世界

① 世界各國の独立

①十二の国魂 ②その他の国魂 ③各国の天職	(二) 経済	①天産物の自給自足 ②有無相通(貿易) ③通貨	(三) 世界の国会開き	①世界政府 ②指導者会議	四軍備	①世界警察軍 ②各国—警察	⑤宗教	①万教同根	⑥政治体制	①祭政一致	(七) 外交	①神示の外交
(八) 憲法	①神界の大法 ②真理の三階級	(九) 教育	①徳主法従の教育 ②天才喬育 ③教育の四大基礎 ④大中小国民教育	(十) 通信・交通	①宇宙一体化	①人種 ②民族 ③混血	②民族 ③混血	③混血	八 法 律	九 政 治		
十 経 済	十一 教 育	十二 社 会	十三 文 化	十四 生 活	十五 科 学 技 術	十六 保 健 衛 生	十七 交 通 ・ 通 信					
十八 職 業	十九 余 暇 ・ 娛 楽	二十 人 口 ・ 食 糧	二一 安 全 保 障	二二 思 想	二三 宗 教							

編集後記

○昭和三十五年の二月に創刊号が出、十二月に第三号が出た後、ずっと途絶えていたのを、約九年振りにこの第四号を出さしてもらうことになった。まず、執筆の諸氏にその労を感謝すると共に、読者のみなさんにも、これを手にされたことを感謝し、かつ積極的なご協力をお願いしたい。

第一は、共に研鑽しようという態度をもっていただくこと、したがってご意見や質問を遠慮なく書き送っていただくこと。次には適当と思われる人々へ本誌を紹介していただいて、教学研鑽の気風を高めていただくこと。

○本誌の内容は、大別して三つになる。一つは指導的なもの、一つは研究論文的なものそして他の一つは資料的なもの。研究論文のものは、主として個人の責任においてものされたものであるから、不審に思われた点は、質問でも反論でも、大いに歓迎し

たい。ただその際、筆者の真意を、善意をもって汲み取るという態度を忘れないようにしたい。

○出口うちまる氏の「お筆先断片考」は、刊行されている「大本神論」の整理編集の中でこれと思う点を摘記されたもので、断片的ではあるが、研鑽の上に貴重な資料である。しかし解説記事でないから、疑問の生ずる箇所も相当あり得ると思うので、あくまでも研鑽の資料として、これに臨ましてもらうべきと考える。

○大国以都雄氏の「出口聖師の言葉を研鑽する」は、神社神道の過去の誤りについて厳しくついているが、これは、大本をも含めて、すべての宗教に対する今後の警めでもある。

○桜井重雄氏の「どういう神さまを拝んでいるか」は、教団の大和合のために、各人の厳肅に反省すべき眼目を、平易に説かれたもの。

○木庭次守氏の「世界経綸の二大根本義」は重要な問題を簡潔に整理してある。米川清吉氏の「大本祭儀史考」は、大切な「祭

り」についての研鑽を深めてゆく上に、ぜひとも心得ておかねばならぬ諸事実をまとめたもので、三浦一郎氏の「大本教義からみた健康道」は、これまた、何よりも大事な健康道について、大本の教からそれをまとめ上げようとするものであり、共に何回かの連続になるが、大いに期待したい。

○教学委員の中で、比較的若い人たちの執筆がなかったのは淋しいが、次号に期待しよう。

○実際の編集事務は、編集課長から研鑽所へ転じて来た窪田英治氏が主として当った。本号が、議が起ってから、案外早く刊行を見たのは同氏の熱意に負うところが多い。

(伊藤栄蔵)

昭和四十四年一月二十八日 印刷
昭和四十四年二月三日 発行

「大本教学」第四号

(非売品)

編集兼 伊藤 栄蔵
発行者 印刷者 土居 重夫
発行所 大本教学研鑽所

京都府亀岡市天恩郷